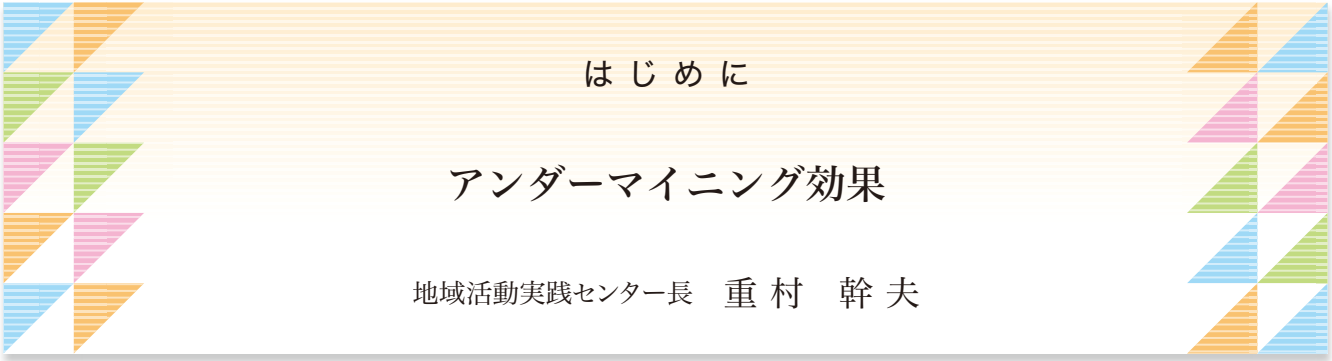




SOCIUS^{No.10}
[ソシアス] 仁愛女子短期大学 地域活動実践センター

1. はじめに	重村 幹夫	1
2. 公開講座・講習会		
生活と環境セミナー		
地域を元気にするデザイン思考	寛 裕介	2
幼児教育公開講座		
おもちゃインストラクターフォローアップ講座		
「遊び力」が身に付くおもちゃ実践論	岡田 哲也	8
スタートした ことも子育て支援新制度		
～変わったこと・変えてはいけなことをあらためて認識する～	増田まゆみ	10
仁愛食育推進事業		
平成27年度仁愛食育講座	岸松 静代	16
保育者ワークショップ		
器楽合奏のイロハ(編曲も含めて)	大久保功治	18
新聞紙ボールで遊ぼう	出村 友寛	21
新人保育者スキルアップ講座	幼児教育学科	23
Microsoft Excel基礎講座・応用講座	情報メディア教育支援室	24
3. 森田地区まちづくり協議会と仁愛女子短期大学との連携事業報告		
重村 幹夫		25
4. 福井市との包括連携事業		
福井市との包括的な連携に関する協定締結	重村 幹夫	27
フクイ夢アート関連事業	西畑 敏秀	29
地域の誇り推進事業(地域連携開放講座)	内山 秀樹	30
森田公民館Webサイトのリデザイン	田中 洋一	31
総合ボランティアセンター整備事業	田中 洋一	32
学生アンケートによる「福井志向」に関する調査・分析事業について	野本 尚美	33
かえりたくなるまち促進事業	澤崎 敏文	34
輝く女性の未来予想図事業	荒井 一雄	35
食育推進事業(食育啓発重点事業)	牧野みゆき	36
市職員による学生への講義	澤崎 敏文	37
5. 福井市家庭子どもセンターAOSSA		
平成27年度 AOSSA 子ども家庭センター・子育て支援室・相談室	青井 利哉	38
6. 多文化体験プログラム		
ロッキーナ先生と「Englishであそぼう」講座	野本 尚美	40
7. 福井市まちづくりセンター「ふく+」の活用		
田中ゼミ&澤崎ゼミ 卒業研究学外発表会	田中 洋一	41
8. 学生の社会的活動報告		
早稲田大学との学術交流会in 福井駅前		42
まちフェスに参加!～マーケティングを学ぶ		42
ふくい夢アート ハロウィンパレード		43
50年後マダムのおしゃれスナップ		43
地域の方々とともに考えた地域コミュニケーション活動		44
子育て応援団「すこやかふくい2015」		44
じんあいこどものくに		45
9. ボランティア活動報告		
栄養研究サークル		46
ユネスコサークル		46
パソコンボランティアサークル		47
折り紙サークル		48
ボランティアサークル		48
10. 平成27年度地域活動実践センター活動報告		
管理栄養士国家試験対策リカレント講座		49
講師派遣		49
学生の社会的活動(ボランティア等)の報告		50
平成27年度教員免許状更新講習		51
11. おわりに		
重村 幹夫		53

※敬称略



以前ある番組で、経済学者とタレントの対談を視聴しました。この中で、ボランティアと報酬の関係について興味深いコメントがありました。確か「ボランティアに報酬を与えてしまうと却ってモチベーションが下がる場合もある」といった内容だったように思います。地域活動実践センターとしては、ボランティアをはじめ様々な地域活動をいかに活性化させるか、そのためにどのような援助が有効か、ということが関心事であるだけに、なかなか新鮮な内容でした。このようなモチベーションが下がる効果を「アンダーマイニング効果」と呼ぶそうです。wikipediaによると「アンダーマイニング効果」とは、「(undermining『弱体化』『土台を台無しにすること』)は、内発的に動機づけられた行為に対して、報酬を与えるなどの外発的動機づけを行うことによって、モチベーション（やる気）が低減する現象。例えば、好きでプレイしていたゲームのクリアに金銭的な報酬を与えられると、やる気がなくなってしまうなど。特に外からの働きかけがなくても勉強している子どもに外的報酬をあげるのは内発的動機づけが低下させることになる。報酬をもらえるという期待がないと、学習しなくなる可能性がある。」だそうです。

「アンダーマイニング効果」を考えると、必ずしも報酬を与えることが活動のモチベーションを高めることにはならないと言えそうです。学生等が本来持っているモチベーションが何なのかを考え、それをうまく引き出す場を設定する事の方が大切なのかもしれません。その一つとして、学生等と地域社会との連携を強めることが有効なのではないでしょうか。

地域活動実践センターは、平成18年に発足しました。その設立趣旨について、本誌“SOCIUS”の創刊号には、「地域活動実践センターは、建学の精神『仁愛兼済』を実践するため、短大が保有する知識等の資源を地域社会に提供し、地域社会の発展と文化の向上に資するためにある。それは、産業や行政をまきこんだネットワークをベースとする教育プログラムを構築し、地域をキャンパスとする教育活動、地域をフィールドとする研究活動の展開を通して全体の活性化を計ろうとするものである。」と記されています。

地域活動実践センターは、今後も地域と本学との橋渡しを果たしていきたいと考えています。その時に「アンダーマイニング効果」についても留意する必要があるかもしれません。

生活と環境セミナー

地域を元気にするデザイン思考

issue+design 代表 寛 裕 介

日時：平成28年2月13日(土) 14:00～

●自己紹介

生まれは福井市内。小学校の時に父の転勤で北海道に、その後関東で生活をしている。

現在、博報堂の社員とNPO 法人 issue+design の

代表、高知県佐川町のクリエイティブディレクターの3つの職をいただき、全国各地で様々な地域の課題を解決する仕事をしている。

●ソーシャルデザインって？

ソーシャルは social issue(社会的課題)。前東京大学総長小宮山先生曰く、日本は『課題先進国』。人口減少、少子高齢化などは、インドも中国もどこもいずれは経験する課題で、一足先に日本が経験しているだけ。ビジネスモデルや社会システムを構築していければ、世界に対して輸出していくことができるのではないかと、という意味で『課題先進国』という言葉を使っている。

今の時代は、とても世の中が複雑になっていて、論理的に考えても答えが見つからない課題がいっぱいある。そういう状況に対して美しさや楽しさとか共感の力、「自分もやってみたい、参加したい」という人の気持ちを動かせるような行為、それが人を動かし、人が集まり、社会に幸せなムーブメントを起こすような行為を私たちは『デザイン』と広い意味でとらえている。

そして、一部のデザイナーだけでなく、思いを持っているいろんな方と一緒に解決していきましょう、というのがソーシャルデザインという考え方である。



1. デザインの可能性1：情報の本質を伝える

デザインが地域の課題解決ために役立つことは5つほどある。1つ目は“情報の本質を伝える”こと。伝えるべき情報の本質を見極めてそれを表現する行為がデザイン。

●演習①人口減少日本・クイズ

Q1：現在1億二千万人の日本の人口は、90年後には何人ぐらいに？

Q2：30年前の結婚世帯の子供の数の全国平均は2.23人、現在は？

Q3：30年前の生涯未婚率は男性で4.3%、現在はどの程度？



人口減少日本・クイズ



回答用紙記入後、隣の人と意見交換

Q1について、2億人ぐらい：2人、1億人：0人、8～9千万人：8割、6～7千万人：1,2割、もっと少ない：1人。答えは4,959万人。正解者はひとり。1、2年前までは増えると答える人が多かったが、最近は減ると答える人が多くなってきたが、8～9千万人と答える人が多い。

では、福井では？ということで、いろんな地域で使えるWebサイトを作った。それによると、福井市は2060年には68%に、日本とほぼ同じペースで減少。他のところを見てみると、越前市は6割、坂井市は69、大野は40、池田町では36まで減る。東京ですら2割減少する。県庁所在地は3割程度、中山間、離島地域から人口がどんどん減っていくということ。

人口減少をどうやって食い止めるか？それを考えるためのツールを使った。例えば福井市は68に減るが、子育てしやすい環境をつくり、現在の合計特殊出生率1.65を2.0にする。さらに仕事を作り、15歳～24歳の男女の転出者数2,400人を1割減らすと人口は80%減でキープできる。

さらに、転入者を20～49歳の転入者4,300人を10%増やすと2050年には今の人口の9割程度を維持できる。



人口減少×デザイン

この数字は現実的な数字ではないが、みんなが共通の基準で理解して考えてもらうための土台として作ったもの。

2. デザインの可能性2：住民同士をつなげる

issue+design は阪神淡路大震災の15周年と神戸がユネスコのデザイン都市に認定された記念プロジェクトとして始めた。

●できますゼッケン

大都市の避難所は行っても周りの人は知らない人ばかり。これは、女子学生2人が提案したもので、避難所で自分はどんなことができて、どういうことが好きなのかを共有するようなIDカードの仕組みを用意すると、支援活動が円滑になるのでは？と考えた。例えば炊き出しが必要になったとき、調理師免許を持っているということが分かれば声かけやすくなる。

これが2008年12月にできて、ビジネスに結び付けることも考えたが、当時行政は防災に金をつける意識がなく、全然ダメだった。

そこから2年ほどたった2011年の3月11日、東日本大震災。2年前にデザインワークショップをやっていたので、津波の映像を見ながら何ができるのか、一晩考えていた。そこで思いついたのがこちら。

翌日、神戸市にいて、神戸の教訓を生かし、役に立つツールを作れないかと相談した。一週間かけて、いろんなバージョン作った。名刺大では現場で機能するデザインでないで、ワッペン形式などいろんなタイプを試してみて、最終的に仕上げたのが4色の『できますゼッケン』。自分ができる仕事の領域を赤が医療・介護、青が言葉やコミュニケーション、黄色が専門技能・特殊技能、緑が一般の生活支援とし、自分ができていることを表現してコミュニケーションがとれることを目指した。

これは、釜石、仙台、石巻で採用され、多少は被災地の現場の支援に役立ったかと思う。



できますゼッケン

● 総合計画

高知県佐川町という人口1万4千人の町。総合計画はどこの町でも作っている。自分たちが暮らすまちが5, 10年後どうなっていくのか、そのために行政がこういうことをやります、ということが書いてあるとても大切なもの。しかし、誰も見ていない、使っていない。それを意味あるものにすべく取り組んだプロジェクト。

●幸福度を軸にした総合計画

我々は10年後に目指す町の姿をしっかりと表現すること、それに向けて行政と住民のアクションプランを明確にすること、これが総合計画であると定義づけた。ここでは、住民の幸福度を測る仕組みを作り、それを高める計画を立てることとした。それを測るのに5つの指標を設定した。

1つ目は「自己実現と成長」、積極的に学んで新しいことに挑戦して成長を実感できると人は幸せを感じる。2つ目は「つながりと感謝」豊かな人間関係があって人に感謝の気持ちを持っている、3つ目が「独立とマイペース」、4つ目が「前向きと楽観」、最後が「安心と安全」、身の危険を感じず、経済的に安定して生活できると人は幸せ。この5つの指標を実感する住民がどんどん増えていくことが、この街の未来の幸せで、そのための計画づくりをやりましょうということに。

そこで、町民に5つの幸せをどの程度感じているか調査して、全国47都道府県でも県民の幸福度を調査し、その結果をもとに佐川の町民はどの程度幸せで、何が問題なのかを考えてもらう仕組みを作った。

調査の結果、幸福度が最も高かったのは、沖縄県。幸福度は客観的指標と主観的指標がある。福井が1位でよく出てくるのは客観的指標。1人当たりの住宅面積、貯蓄額、医療機関数など。我々は主観的な指標、つまり住民が先ほどの5つの指標についてどう思っているか？というアプローチをした。

トップテンは沖縄の1位をはじめ、西日本の県。ちなみに福井は13位。福井の人は「幸せだ」と実感している人も多く、生活環境も良いという結果。5つの指標をみると、「安全・安心」「人とのつながりを感じ

ながら暮らせる」が55以上ですごく高いが、「新しいことへのチャレンジ」と「自分らしさ」が50を割っている。

佐川町は675ポイントと全国で6～7位と極めて高いが、住民も行政職員も危機意識が薄く、チャレンジ意識が低い。自己実現の文化を根づかせてないと、益々厳しくなっていく、と町長が話していた。



佐川町総合計画

計画は誰が作るの？我々はこの町の10年後を考えながらみんなで作るという手順を設計した。佐川町をもっと幸せにするための定員を考えようということで、約200名に集まってもらった。15テーブルに分かれ、色んな町の課題を議論した。

その後、観光、仕事、健康、育児など、テーマ別に
分かれて、各々の領域の未来を考えた。その後“次世
代”として中学生、さらに“地区（旧村）単位”、全
16回のワークショップで未来を考えて総合計画を
作った。中学生もとても積極的に参加してくれた。

計画書は住民向けと行政職員向けと2種類を作成。町の未来像を25個住民の方の声から拾いあげて、10年後こんな町になるために皆さんこんなことをしてください、とまとめた。盛んな林業を活かした「佐川ものづくり大学」、植生豊かな佐川を「まち丸ごと植物園」にして住民がガイドになってもらい、みんなが散歩できるようなまちなど。書籍化したのは、佐川がどんな町を目指しているのかを世の中の人に発信したいから。

3. デザインの可能性3：地域愛と誇りを呼び起こす

コミュニティラベルガイドは、現在第5弾。コンセプトは人との出会いを楽しむ旅のガイドブック。第1弾が『^{あまじん}海土人』^{あまちよう}島根県の海土町。かなり評判がよく、第2弾を考えていた時に、東京で活躍している福井出身の4人組が熱心にこれを作りたいと。彼らを中心に福井のいろんな人にかかわってもらいながら作った。

●コミュニティトラベルガイド『福井人』

—『福井人』メイキングビデオ上映—

中身はシンプル、福井の素敵な人を紹介するというガイドブック。三国で海女をしながらサーファーを楽しんでいる素敵なお母さん、大野でトンちゃんて頑張っている人や、恐竜博物館の館長、永平寺の料理長などが紹介されている。鯖江で眼鏡女子に集まってもらって取材したり、おろしそばにうるさい人におろしそばの魅力と店を紹介してもらった企画など、基本的に観光コンテンツを人を通じて紹介するという視点にすることによって、福井の人の魅力を伝えていこうという視点。



コミュニティラベルガイド『福井人』

この取り組みは、公募で集まった人に候補者を出していった、取材に行き原稿を書いてもらった。もう一つの大きな特徴は、制作費の資金をクラウドファンディングをつかって集めた。最終的にインターネット以外の寄付も含めて250万円ぐらい集めて、出版にこぎつけた。

● 『大野人』

その後、一旦、三陸の復興の企画を挟んでいるが、引き続き『大野人』に取り組むことに。これは、『福井人』に参加した大野市の職員が、大野でも作れないか？ということではじめた。

大野の人は優しくあったかくて人を受け入れてくれる、そんな人と人のつながりを表現した「結の故郷」のロゴをつくった。それを体現する『大野人』。大野という狭いエリアで密な関係の人たちが集まって、すぐく丁寧にワークショップをしながら作っていった。大野の宝物を発掘するワークショップを行い、その宝物をどう表現できるかを考えるフィールドワークをした。

最終的には「越美北線」、「軽トラ」、「雪かき」、「パーベキュー」、「里芋」の5チームに分かれて、それぞれの宝物を表現するための企画づくりをした。

例えば大野のバーベキュー文化がおもしろいので、上庄の里芋、野菜、ホルモン、これらを楽しむ新しいバーベキューを観光コンテンツにできないか？ということで、寒い冬だったが、食材を買い込んできて試しにやってみた。七間の朝市で野菜を買って、ヒネどりなど大野や福井ならではの肉を買ってくる。そこでバーベキューの定番スポットを紹介するのでそこではありませんか？という観光コンテンツ。



コミュニティラベルガイド『大野人』

4. デザインの可能性4：人と経済を動かす

林業の町、高知県佐川町で行っている「モノづくり大学」。時代背景の議論の中でモノ作りの民主化が起きているのではないかと情報も同じで、昔は自分の意見や考えを広く世の中に発信する手段がなかったが、今はSNSでも簡単に大きく発信できる。モノづくりの世界も大きく変わりつつあり、皆さんのようにデザインを学んだ学生がそれで食べていける3Dカッター、3Dプリンターなどのデジタル工作機械が普及し、同様にハードルが下がった。

資金調達も先ほどのクラウドファンディングだと100万円単位で集めることも可能になり、販路についても手作り商品売買サイトをはじめハードルが下がってきている。

佐川モノづくり大学は、佐川産の木材を使って、自分で企画して、お金も自分で調達して、作る場所もチャレンジして販売するところまでサポートする場。誰でもモノづくりができるLabo機能や仲間というんな議論ができるCafé & Libraryがあり、様々な技術が教えてもらえるワークショップも定期的に開催されている。

●勉強したくなる机

ここでは日本の最先端のデザイナーや研究者やエンジニアに自分の作品や研究を発表してもらい、それをベースに佐川でどんなモノづくりができるかというワークショップをやっている。その中で東大の筆記用具の研究をしている研究者が、ひとはモノを書く時の音が大きくなると、書く行為を自己認識でき、結果として書くことに集中できることが学術的に検証されているといわれている。

ある人が、「娘が線や字の練習を始めたが、全然机に座ってられないが、音も好きだからこれを使ったら意外と書くことも楽しくなるのでは？」という話が出て、実用化に至ったプロダクト。イタリアのデザイン市に出展して海外の人にも使ってもらった。このようにモノづくりの民主化はグローバルに広がっている。



『Write More!』

5. デザインの可能性5：義務を楽しみに変える

行政は「〇〇をしなければならない、してはならない」と義務的、禁止的な言い方が多い。デザインはこれを楽しみに変えていくことができるのではないかと。

ある学校の先生が、「子どもたちにプログラミングや電子小作のようなものを学ばせたい」といったが、あまり面白くないし、一部のマニアックな子はするが、興味のない子は全然しようとしなない。デザインもしかり。

これは世界で一匹のオリジナル動物ロボットを作るプログラム。このようなキットを使って3回で完成。最初の授業は電子工作の授業。線をつないで、モーターをつけて動かす。アルデヒノという小型マイクロコンピュータを外のパソコンから制御することができる。

次は、デザインの授業。無味乾燥なロボットを面白いオリジナルな動物に仕上げる。落ちている葉っぱや木の実などを材料にペンやグルーガンを使って接着する。

そしてプログラミング。指令を与えると指令通りに動くことを体験してもらう。まずは前後移動。次はLEDを赤、青、緑に変化させる、最後は音のコントロール。ブロック形式で簡単にプログラミングできるソフトを使って自分たちでやってもらう。これを通じてモーターの動く仕組みやデザインやプログラミングに興味を持ってきて、自ら学んでもらうきっかけになると、義務的でなく話が広まって行って、子供達の創造性が高まるのではないかと、というプロジェクト。

6. まとめ

デザインが地域の課題解決のためにできる5つのことをお話した。地域の課題、それは、防災、教育、まちづくり、産業なんでも構わない。それらの課題をデザインの力で解決する、その力も絶対的に正しい論理的に優れた解だということよりも、見た人がやりたい、子供達がロボットを作ってみたい、と思ってもらえるかどうかはわれわれが勝負しているところで、ここを“デザイン”といている。美しさや共感の力で人の心に訴えられて、行動が喚起されて、結果的に社会に幸せなムーブメントが起きていくといいなと思いつながら仕事をしている。

冒頭に人口の話をしたが、少子高齢化で人口が減ってまだまだ地域の経済は厳しい状況がある。そんな中でデザインという行為が、すごく複雑化している世の中の本質を直観的に捉えて多くの住民の心に訴える、それが仲間とのつながりや地域愛を育み、人や経済が動き出す。そのための地域づくりのプロセスとして多に役に立つことではないかと考えている。皆さんも卒業後にどういう形でデザインに関われるかわからないが、是非地域のために皆さんが持っているデザインの力を使って頑張ってもらえれば、と思う。

質問

Q1 ソーシャルデザインの分野でやっていこうと確信を持ったきっかけは？

A1 入社5、6年目、携帯電話会社の広告の仕事でニューヨークに滞在。2001年9月11日のワールドトレードセンター飛行機突入テロに遭遇。広告の仕事はすごく面白いが、消費を回していくタイプの仕事なので、時間の速度が早すぎる。もう少しじっくりと日本や世界や社会に踏み込んで行けるような仕事をしたいと思い始め、自分でプロジェクトをやり始めた。

Q2 具体的に地域に入っていく段階では、どんな感じでアプローチしていくのか？

A2 まず、1対1のコミュニケーションをしっかりと行い、関係性ができればワークショップなどに来てくれる。うちのメンバーが一度話をしているので、「来ませんか？」

というほとんどが来てくれる。来てもらったら「場のデザイン」、2時間をどれだけ楽しい、もう1回来たいと思ってもらえるか？そこは、我々が勝負しなければならないところ。参加者の気持ちや動いてくれると次は自然と来てくれるし、仲間を呼んできてくれる。

Q3 やりがいのある仕事だと思うか？

A3 そう、幸せな仕事をさせてもらっていると思う。うちの若い子たちはものすごく忙しい。全国7、8箇所のプロジェクトが動いていて、担当エリアを持っていて、ガンガン入っている。儲かるような仕事ではないが、彼女たちに約束しているのは、新しいチャレンジができて、絶対的に面白い仕事を作ってくるのが私の仕事で、文句言わずに頑張ってもらえ、というスタンスに皆ついてきてくれている。

ただ、課題は非常に難しかったり、複雑だったりするが、それを紐解いて解決して何か新しいものを生み出していく仕事は、すごく創造的な仕事でやりがいのある仕事。

Q4 「できますゼッケン」は、どこで費用を回収するのかを念頭に置いて進めたのか。

A4 やりがい、新しいチャレンジができることが第一で、それと報酬は食べていくために必ず必要なもので、そのバランスをどう取るかは、私が考えなければならないこと。中には報酬を取らないという選択も。

「できますゼッケン」は、どういう形で印刷して東北に届けたらいいかが課題だった。新幹線も高速も不通で、そこから沿岸まで車で3時間。大量に印刷してスポンサー企業を募って持っていても、避難所に山積みにしても誰も持っていかないなあと思った。そこで完全にWebサイト上に公開した。A4にしたのもこのプリンターでも印刷できることを想定した。セブンイレブンの“net print”にアップして、どこの店でも出力できるようにして活用できるようにしてくれた方がいた。何らかの手段で行こうと頑張っている人ができるだけ簡単に印刷して持って行けるという流通のデザインを一番意識した。このプロジェクトに関してはお金がかかっていないといえ、かかっていないので収益はゼロ。

以上
(文責 内山秀樹)

幼児教育公開講座

おもちゃインストラクターフォローアップ講座
「遊び力」が身に付くおもちゃ実践論

東京おもちゃ美術館 岡田 哲也

日時：平成27年5月9日(土) 13:00～16:00

◆講座要項掲載内容◆

【13:00～15:00】「遊び方」が身に付くおもちゃ実践論

本ワークショップ(WS)は3部構成で行います。

(1) 世界のおもちゃパフォーマンス(40分)

東京おもちゃ美術館でも人気のおもちゃの遊び方を紹介するパフォーマンス

(2) おなじおもちゃをみんなで遊ぶWS(40分)

参加者全員が同じおもちゃで遊ぶワークショップ

(3) 積み木WS(40分)

積んで遊ぶだけではない、新しい積み木の遊び方を参加者と一緒に見つけていくワークショップ

【15:00～16:00】情報交換会

本学公開講座にておもちゃインストラクターの資格を取得された方やNPO法人グッド・トイ委員会の会員の方を対象に、実践力の向上を目指した「おもちゃインストラクターフォローアップ講座」を開催しました。東京おもちゃ美術館の岡田哲也先生による『「遊び力」が身に付くおもちゃ実践』をテーマにしたワークショップ形式の講座であり、41名の方が参加されました。保育士、児童厚生員、児童指導員、学生など、また、年齢層も10代から60代までと幅広い参加者となりました。



東京おもちゃ美術館の岡田先生



「かおレイヤー 注1」を使って、部屋の中の色んな「かお」を探しました。



「かおレイヤー 注1」を顔にあて、色んな表情を楽しみました。

注1「かおレイヤー」：透明カードに顔のパーツが描かれており、それを色々なものに重ねて遊ぶおもちゃ。



積みきを並べていると、透明人間に邪魔をされてしまいます。



感覚で自分の顔の高さに積み木をつんでみましょう。思ったよりも高かったり、低かったりします。

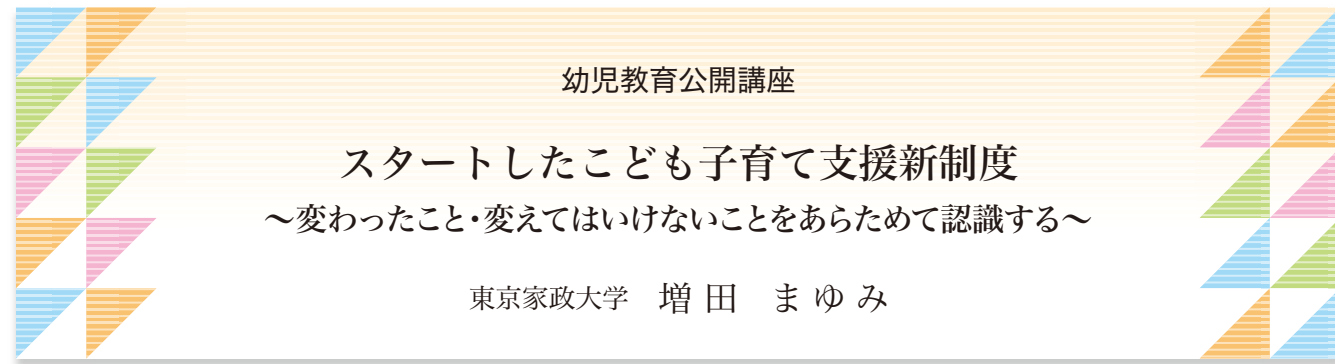


息を合わせて手の上に積み木を積んでいきます。

本講座に関して、参加者の方にたくさんの感想を頂きました。以下に、その一部を抜粋してご紹介します。

- 新しいおもちゃを知ることができた。今持っているもので新しい遊びを知ることができた。子どもへの感じさせ方を改めて考えることができた。
- 一つのおもちゃで年代にとらわれず遊べることが分かった。
- 積み木の遊び方のレパートリーが増え、それだけでなく考え方、視野が広がった。
- 先生の楽しいトークをまじえて「遊ぶ」ことの楽しさが身体一杯で感じる事ができました。先生のトークは「言葉の遊び」だと感じました。
- 今あるおもちゃでも今の遊び方以外に十二分に遊ぶことができるのだと知り、早速かえってやってみたくなりました。
- 子どもが最初に出会うおもちゃについて考えさせられた。「ぎょうれつぎょうれつ」の絵本の紹介があり素敵な絵本だと思った。
- 「かおレイヤー注1」がとても楽しかったです。かおのパーツを褒め合うことによってコミュニケーションが取れたり、まわりを見てかおのパーツを探したりと刺激を受けることができました。
- 様々な方との交流が楽しめた。
- 今回の講座で福井の仲間で思いを共有する方と知り合えてよかった。
- おもちゃはコミュニケーションツールだということを感じさせてもらいました。
- 色々な人と関わりながら活動できて楽しかったです。自分が知っているおもちゃもありましたが、遊び方が様々で今後使っていこうと思いました。
- 年に数回開催してほしい。
- 時間が足りない。
- 2時間は短いのでレクチャーも1時間ほど入れてほしい。おもちゃ美術館での実践、世界のおもちゃの動き、流行、流れも教えてほしい。

(文責：出村友寛)



日時：平成27年12月5日(土) 14:00～16:00

I. はじめに

私は、ここ何年か、一方的にお話をするだけではなく、集った方々がその場で、聴く、見る、考える、書く、そして、声に出すという参画型での研修としています。どうぞ、よろしく願い申し上げます。

子どもとともにある日々の生活の中で、季節の変化を強く感じながら過ごしていらっしゃると思います。初冬のある日、真っ青な空に、色づいたの葉が太陽の光にまぶしいほどの銀杏の木、木の下には落ち葉、思わず写真を撮りました。(パワーポイントで写真を提示) さて、そのような環境で、子どもは、どうするだろうか、どのような遊びをはじめるだろうか、保育者として「私」は何をするだろうかなど、イメージしてみてください。

そして、イメージしたことを、書いてみていただけますか。私がマイクをお向けしましたら、どうしてもお嫌だったらお声を出さなくてもいいのですが、できるだけお声をお出しくださいませ。

参加者 A

私がイメージしたのは、落ちた葉っぱの中でいっぱい思い切り走り回ったりで、拾った葉っぱをフワッと上げたり下げたりして、何かこう、すごい自然の中で、子どもと一緒に楽しんでいることを書きました。

素敵ですね。拍手を。大変いいですね。園の中でも、家庭の中でも、「あ、素敵だな」「よかったな」と思ったら、その「よかったな」という思いを表現することが大事です。子どもに対しては、そのことをとても大事にしてもらっています。しかし、同僚との間でも、保護者との間でも、保護者同士でも、「よかったな」と思ったら、そのことを表現し合う、認め合うという

ことが大事にしましょう。

次に、おやりいただきたいこと、昨日・今日という期間に、レジュメには三つ枠が示してありますが、心動かされたことを一つだけお書きください。

参加者 B

手をけがした子がいたんですけど。その子が、自分ではいつもはパンツをはくのですが、昨日は「痛い」と言っではこうしなかったの、で、「痛いよね」と言って、一緒に交換してあげたときに、「じゃあ、ここで手伝ってあげようね」と、少し上げると、痛かった手をそっと出してきて、自分でスッと上げて、「できたよ」と言ったその表情がすごくうれしくて。「今日は先生と一緒にできたね。よかったね」と言って。痛みを忘れて一緒にした姿がすごくうれしかったです。

それは、うれしかったですね。こうしたエピソードを語り、聴き合う研修会ができれば素敵ですね。現在の保育の場で、残念に思うのは、こんな風にゆっくりと同僚と語り合う時間の確保ができてにくいことです。しかし、せめてこうした研修の場でも、保育を振り返りながら、自分の思いを語り、多くの方々と共有することが大事だと思います。



さて、強く感じ、思ったことは保護者に伝えたい、そして対話や連絡帳等を通してしてますね。保護者と子どもの育ちを共感し、共有し合いながら、保育がそして子育てがなされていくのです。

次に進みましょう。親として、保育者として、大切にしていること、これもたくさんあるかと思いますが、今は一つだけお書きください。お書きになりながら聞いてください。今、やっていたいていることは、園の中で同僚とやっていただきたいことなのです。親として、保育者として、大切にしていること。つまり、これはお一人お一人の子ども観、子育て観、保育観、つまり価値観が表現されています。それぞれが、今心の中に持つその思いを文字で表すこと、可視化することが大事です。さらに、可視化したことを、同僚と、また保護者との間で共有することが大事なのです。保育の場は、家族で構成されているわけではありません。しかし、家族のような雰囲気、園でありたいという、基本方針をもっていらっしゃる園たくさんあると思います。だからこそ、価値観を共有することにより、組織の基盤を強固なものにしていくことが必要となります。

実際に園で取り組むときには、一堂に会することは不可能ですので、付箋紙を全職員に、短時間勤務の方も含めて配布しておき、時間があるときに書き入れるようにします。1週間後、収集し、何人かの職員で、いわゆる KJ 法を用いて、仲間集めをし、そこにキーワードを書いていくのです。その結果、今、保育を担っている組織の全職員が、大切にしていること、換言すれば、価値観を全員で共有することになります。

保育者としてのよき、五つ欄があります。「よき」というと、「いやあ、ないな……」と悩む方が結構いらして、次の「私の課題は」というと、「それならサッサと書けますよ」とおっしゃる方が多いのです。ポイントです。まず、「よき」から自分のことを知り、しかも数を多く、続いて、課題は数少なくすることです。子どもを見る目、保育を見る目、保護者を見る目、同僚を見る目も同様です。真面目で一生懸命に保育に取り組む方ほど、「〇〇ちゃん(さん)、まだこれできて

今の私を知る

- ・親として・保育者として……大切にしていること

--	--	--

- ・親として・保育者として……知りたいこと・不安なこと

--	--	--

「私」は……

- ・私のよきは

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

- ・私の課題は

- ①
- ②
- ③

「私」を支えてくれる人

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

「私」が挑戦していること・楽しんでいること

- ①
- ②
- ③

ないよね。みんなと同じように早くできるようになってほしいな」等、できていないこと、困ったことにまづ関心を寄せるのです。でも、子どもの立場になったら、こうしたマイナス面に着目した受け止めは、悲しいですね。「よき」を認識し。その上で、さらに「こんな子に育ってほしいな。今できないところに挑戦してほしいな」とみていく。自分自身に対しても、他者に対しても同じことです。自分を好きになれない人が、他者を好きになれるでしょうか。

次に、私を支えてくれる人、日常生活の中で、このことを意識することの重要性を強く感じています。保育士の離職率の高さ、悲しいですが、実態です。全国保育士養成協議会の調査でも退職する一番多い理由は、人間関係です。新任者等が、現場で、いろいろ思い悩むときに、「助けて」と言えない状況があるのです。「いや、私の園ではそういうことはない」と言い切れるでしょうか。基本的に、仕事はどんなに有能な人であっても一人ではできません。支えてもらい、そこを乗り越えた経験のある人は、必ずその後、何かの機会に、自分が支えてもらったように他者を支えることができます。しかし、支えてもらった経験のない人は、どう支えたらいいかわからないのです。

愛情をたっぷりかけられ、優しさを持って育った子どもは、やがて大きくなったときに、他者に対して自分がしてもらったように優しくできる。でも、優しくしてもらった経験のない人は、「優しくするのよ」と言われても、どう具体的にしたらいいかわからないということになります。支えてくれる人がいる、ときには甘えても大丈夫、という安心感があると、乗り越えられるのですね。

今日もすごいですね、土曜日、1週間の仕事を終えて、本当は家に帰ってのんびりしたい、買い物をゆっくりしたい……。ここにいらっしゃる方全員がそういう思いをもちつつ、学ぼう、知ろうという思いの方が強かったのです。「ああ、疲れた」「忙しくてもう嫌になっちゃう」。こうばかり言う人は魅力がありません。常に、前に向かって、何かに挑戦している、人生を楽しんでいる方はとても魅力ある存在なのです。それは、子どもにとっても、同僚にとっても、また保護者と保育者という関係の中でも、家族の間に関係においても、共通です。



II. 子育ての実態と子ども・子育て支援新制度

さて、平成27年4月から、「子ども・子育て支援新制度」がスタートしました。新しい動きの中で押さえておくことがあります。それは、保護者が子育ての第一義的な責任を持つということです。つまり、すべての子どもを、すべての子育て家庭を対象にし、社会の責任として、子どもの育ちを大切にしていこうという趣旨です。どんなに社会的な制度等が整備されたとしても、それは保護者に向かって、「あなた方はもうやらなくて結構ですよ」「どうぞ、ゆっくりとお過ごしください」「何でもおやりください」「私に子どもをお任せください」ということではないですね。一義的な責任は保護者にある。しかし、保護者だけが負担を負うことがないようにということです。

III. 新制度での保育の基本（真）を確認

また、幼児期の質の高い教育・保育という文言が、繰り返し出てきます。去年の4月に、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が告示されました。

その結果、我が国の就学前の保育の基本として、「幼稚園教育要領」、「保育指針」、そして「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」、この三つが告示されているのです。当然この三つがそれぞれ向かう、目指すものが違っていただけでは大変です。整合性が図られ、そのすべてにおいて、重要なものとして位置付けられているのが、発達と学びの連続性です。保育のあり方等が大きく変わろうとしている今、どのように時代が変化しても変えてはならないものと、時代の変化の中で変えなくてはならないものという、二つの視点（「し

ん「真・新」）で考えていくのが本日の研修の目的の一つです。

ところで、子育ての実態ですが、2010年ベネッセが実施した調査では22.1%の母親は、自宅で自分と子どもだけで過ごす時間が1日15時間以上です。そして、いずれの年齢においても15時間以上と回答した比率は首都圏のほうが高いのです。これは、父親の就労時間等との関連があると思います。また、29.8%の母親は子どもの祖父母に子どもを預かってもらうことがまったくない。これも、距離的に離れたところで生活をしているという方も多くある。しかし、距離的に近くても、こうした関係に「ならない」「なれない」「なろうとしない」など、いろいろです。

子どもの発達、育ちについて、現保育所保育指針の第2章に、「子どもの発達は、それまでの体験をもとにしながら、環境に子ども自らが関わり、環境との相互作用の中で豊かな心情及び態度を身に付けていく。そして、新たな能力を獲得していく過程ですよ」と説明されています。

新制度で、幼稚園・保育所ともに移行の義務はないということで、幼稚園・保育所、そして認定こども園、認定こども園は四つのタイプがあるということが図示されています。幼稚園が左側、はみ出ています。これは、施設型給付ではなく、従来の私学助成の制度のままの幼稚園です。

次に示されているのが、地域型保育給付、新たな制度の中で法律に位置付けられた19人以下の小規模保育所、家庭的保育、居宅訪問型、事業所内保育等です。これらは、3歳未満児を対象とし、小規模で家庭的な雰囲気の中で保育していくものです。

横浜市の人口は370万余という状態です。かつて保育所待機児日本一と言われたのですが、それをゼロにしました。そのことに「ゼロというが、株式会社など多様な法人が入っている」「横浜、大丈夫なの？」という意見もあります。しかし、もし、株式会社等を強く排除したら、待機児問題はますます大きくなります。その結果どうなるかというと、劣悪な条件の認可外保育施設に行かざるを得なくなるのです。悲しい事

件も今なお起きています。入口は広げ、その分、第三者評価を必須にするなど質の確保を図ってきています。日本全体でいうと、都市部と人口減少地域とでかなりの違いがあるのです。

新制度の主旨は、多様な保育の場、子育て支援の場が用意され、保護者が選択できるということです。しかし、これは、待機児問題がある程度解消されないと無理ですね。

さて、先ほど申し上げましたように、1日親子2人だけで、かなりの長い時間過ごし、また、就労と子育ての両立を図っている人よりも、専業主婦のほうが子育てに対する負担感が強い、さらに、0歳児は、保育所に入所しているのは、全体の11%程度で、かなり増加しているとはいえ、90%弱の子どもは家庭で過ごしているのです。3歳未満児の家庭で過ごす子どもの比率の高さを認識する必要があります。

新制度について、内閣府がわかりやすい資料を提示しています。レジュメの中にその一部を入れてありますが、「消費税増税分を活用し、子育てを社会全体で支えます」と説明しています。その際、量の確保だけでなく、質の両方を考えている、その為の財源確保が消費税です。ご存じのように、世界のいろいろな国と比べて、日本が就学前の保育のための、それから学校教育全体でも、GNPに占める割合が低いランクにあるのです。保育者が疲れ切ってしまったら、また、保育者になろうとする人がいなくなってしまうたら、どうにもなりません。そういう危機的な状況にあるのです。

子ども・子育て支援法に基づくすべての子ども・子育て家庭を対象とした支援において、1号、2号、3号認定と提示しています。1号、2号、3号という言い方そのものが、何か嫌ですね。でも、今の決定した段階では、保護者等に説明できるようにしておくことが求められます。

こうした新制度の中で、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が告示されました。文科省、厚労省の合同の会議が開かれ、わが国の就学前の子どもの保育について、一緒に検討したということは意味があったと

思います。本来、基本は1本でいいとすべきですね。

度々出てくる「質の高い幼児期の学校教育及び保育」、こういうふうに書かれると、保育所での保育を主にやってきた方々にとって、保育所保育指針では、昭和40年以来、「養護と教育が一体となった」保育を推進してきました。「今のままじゃいけないの？」今までのままだと、それは質の高い学校教育、教育と言えないの？」など不安になったり、混乱が生じているのではないかと思います。保育所保育指針、幼稚園教育要領との整合性を図って、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が策定されたことを、強く認識していただきたいのです。

関連して、平成21年度から、保育所児童保育要録が小学校へ送られています。幼稚園から入学、保育所から入学、そして、認定こども園から入学する子どもいずれもが、共通のねらい・内容であることも、改めて認識しておきましょう。

「小学校における教育との円滑な接続」については、これも三者共通して重要なものとして位置づけられています。例えば、福井県は、幼保小の連携に積極的に取り組み、アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムが、それぞれ1年間という期間の中で検討され、それを生かしています。

保幼小の取り組みとして、園児と小学生との交流は、多くの園でやっています。次のステップである、研修や研究を保・幼・小で行うことも求められています。さらに次のステップが、アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムなど、カリキュラムの策定です。福井県はその点、すでにしっかりと取り組んでいらっしゃると思います。

今日、申し上げておきたいことは、この質の高い幼児期の学校教育は、決して目に見えるかたち、また、当然ですが、小学校教育の先取りをするようなことを言っているのではない、そういうふうにはならないということを強調しておきたいと思います。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の総則に示されているいくつかのポイントをお話します。まず、「環境を通して行う」という保育の基本です。今回の

教育保育要領は、総則がとても長く、いろいろな内容が含まれています。続いて、「保育教育等は、園児との信頼関係を十分に築く。」、また、「依存を基盤にしつつ自立へ」という保育の基盤となる内容が示されています。

「子どもの生命の保持、安定した情緒」と、まさに保育所保育指針が示す「養護」のことが総則に提示してあります。この養護に支えられて、「園児の主体的な活動を促す」、「幼児期における自発的な活動としての遊び」と、これまでの基本と変わるところはありません。

さらに、「生きる力の基礎を育成する。」、これも現保育所保育指針、幼稚園教育要領と共に継承しています。文科省は、ゆとり教育は失敗だったと早くも反省し、見直しをしましたが、「生きる力」については、継続し、変わっていないのです。平成8年、中央教育審議会は、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」、そして、三つ目が「たくましく生きるための健康や体力」と示しています。皆様方にはぜひ、この3つと、具体的な保育実践を繋げて改めて考えていただきたいと思います。

さらに、総則では「園児一人一人が安定感を持って過ごす。自分の気持ちを安心して表すことができるようにするとともに、周囲から主体として受け止められ、主体として育ち、自分を肯定する気持ちが育まれていくように」と示されていますが、このことは、何よりも大事です。自己肯定感を育むことが、就学前の保育でとても重要であることを認識しましょう。しかし、残念ながら世界の国と比べたときに、わが国の青少年の自己肯定感は低いのです。なぜなのか。私たち就学前の保育を担う者も、そして小中高教育を担う者も、さらに保護者も含めて、真剣に考えなくてはならないと思います。

IV. おわりに 保育・子育てにおける新と真

最後に、震災後の福島訪問からの学びについてお話しいたします。昨日、福島の認定こども園に行ってみました。

これは去年のある福島の保育園の写真（パワーポイントで示す写真）です。震災後、子どもたちは恵まれた自然環境であったはずの戸外に出ることができない、落ち葉がいっぱいあるのに、それに触れることもできない。そういう状態でした。そこで、東京家政大学の構内の樹木の落ち葉をビニール袋に詰めて、車で持っていき、落ち葉と触れ合う活動をしました。その後、時間が経過する中で、一部を除いて園庭が使えるようになりました。

樹木の間を走り回る子ども、自分で拾った大切などんぐりを「あげる」と私と同僚に手渡す子どもの笑顔に、思わず目頭が熱くなりました。この日、日曜日でしたが、震災当時、小学校1年生、2年生、3年生の子ども、そして年中、年長児が保護者とともに参加しました。樹木が茂る斜面から園庭に水がしみ込まないように、並び立つコンクリート製の大きな塀。子どもたちが学生とゲームを楽しんでいる間に、その塀を保護者の方々にペイントし、白真つ白なキャンパスに変えていただきました。大きな白いキャンパスには7色の手形の花、ダイナミックに1年生、2年生、3年生が絵の具を垂らし、子どもの思いとそれを支える保護者との合作となりました。白い園舎、樹木の緑を生かす、メモリアル壁面です。

東京家政大学として、何かできることはないかという思いで、学生と教員が、福島を訪問して4年、多くの人との出会いの中で、深く、大きな学びを得ています。今まで当たり前にあったことが失われたとき、子どもの育ちに何が必要なのか、保育の原点に気づかされています。そして福島の問題は、まだまだ解決していません。福島を忘れず、関わり続けることが大切だと強く思っています。

津守真先生が「保育者の地平」の中に書かれている文章をご紹介します。「子どもの行動を表現として見ることを発見した。行動は子どもの願望や悩みの表現であるが、これは誰かに向けての表現である。それは、答える人があって意味をもつ。子どもが心の中を表現する遊びを生み出すことは、保育実践の最大の課題である。その遊びの中で、子どもは癒され、教育される。」

以上



平成27年度 仁愛食育講座

仁愛女子短期大学 教授 岸松 静代

1、はじめに

年4回シリーズの食育講座は、今年で8年目となります。毎回、どんな献立にしようかな？と知恵をしぼるのです。今年も土曜に4回実施しました。講師は本学教職員2名と学生3名がお手伝いする体制です。

2、講座内容

【第1回】6月6日

炊き込み飯、豆腐のあんかけ、
スナップエンドウとタコの胡麻和え、
ショコラわらびもち
(参加人数 10名)

春の日本料理です。あさりの炊き込み飯では、汁が出て水加減がわかりにくい貝を先に煮立て貝の実と汁に分けて、汁を米の炊き水として加えるとわかりやすく出来ます。ほうれん草とえのき茸の豆腐あんかけ、スナップエンドウとタコの胡麻和えと優しい味の料理との相性もぴったりです。デザートは、チョコレート入りのあんを包んだわらびもちです。プルプルの食感とチョコの濃厚な甘さが何とも言えない絶妙なハーモニーを産んでいます。



【第2回】7月11日

ワントンスープ、春雨の酢の桃、麻婆茄子、
冷やししるこ
(参加人数 21名)

夏の中国料理です。ワントンスープ、春雨胡瓜ハムわかめの酢の物、麻婆茄子です。茄子の揚げたものを、ピリカラのたれと合わせる麻婆茄子は、暑い季節にぴったりの料理です。冷やししるこは、求肥のもち、あん、ココナッツミルク、バナナと4種類のトッピングの甘さでまさに『禁断の味』。濃厚な甘みを味わってください。



【第3回】9月19日

かぼちゃのスープ、クリームコロッケ、
サラダ、クレープシュゼット
(参加人数 26名)

初秋の西洋料理です。旬の南瓜を使ったスープです。小麦粉を使わないで、米でとろみをつけたスープは優しい味です。クルトンの代わりにクラッカーを使って手軽につくります。クリームコロッケは、ホワイトソースで和えた具に小麦粉・溶き卵・パン粉をつけるのが難しかったけれども、揚げたてのコロッケは格別のおいしさです。サラダはえのき茸、青シソ、レタスを使ったさっぱり味のサラダです。デザートは、クレープシュゼットです。クレープを焼いたものにオレンジソースをかけたものです。イギリスのウェールズ地方で王子様が名づけたといわれています。



【第4回】12月5日

山菜おこわ、鶏肉とレンコンの炒めもの、
白和え、香茶巾
(参加人数 19人)

冬の日本料理です。山菜おこわは、炊き蒸しおこわです。山菜、鶏肉、きのこなどの具を加熱し味をつける中に、もち米も一緒に味を吸わせて、その後一気に蒸すご飯ものです。蒸したての熱々は「日本人にうまれたよかった」と思う瞬間です。旬のレンコンを使った炒め物と白和えと和食のおいしさをしみじみと味わっていただきたい献立です。デザートは香茶巾です。抹茶、生クリームの入った抹茶ゼリーにレモンシ

ロップをかけていただきます。お抹茶の香りとクリームのなめらかさ、レモンの甘すっぱい味が混じり合った複雑な味わいをお楽しみください。



毎回、和気あいあいの内におわります。短大の実習室を使うので設備がそろっていて広々と使えることや、皆と一緒にできる事、若い学生さんと一緒に気分が若返る事、料理のレパートリーが増える事等、何かしら良い点があるのではないのでしょうか。これからもずっと続くといいなと思うこの頃です。

器楽合奏のいろは（編曲も含めて）

仁愛女子短期大学 教授 大久保 功 治

【編曲講座の趣旨】

人間の音楽的な発達は聴くことから始まる。母親の歌声やテレビの音楽などがそれにあたる。やがて、耳にした音楽を口ずさむ、いわゆる歌うことが始まる。聴くこと、歌うことはすべての人に通じる音楽活動の基本である。友人同士でカラオケを楽しむなどは、立派な音楽表現活動である。さらにこれが進歩すると、楽器を使って演奏表現することに発展していく。宴会で徳利や茶碗を叩く、手拍子を打つなどはこれらが自然的に発生したものであり、楽器演奏の初期的段階である。幼児教育に於いては、聴くこと、歌うこと、楽器あそび等の音楽表現活動を無理なく、ごく自然に導入することが望ましい。音域幅の広い曲を歌わせたり、複雑な技術・呼吸法・指使い等が必要となるような楽曲の楽器演奏をさせることは、結果として大声で怒鳴る歌い方になったり、楽器アレルギーや音楽嫌いの予備軍を作りかねない。それでも、発表会等では親御さんが驚くような立派な演奏を披露し、子どもの成長を見届けさせてあげたい、と思われる先生方がほとんどのはず。そこで、本講座においては、指導が無理なく自然にできて、演奏表現が平易で効果的、且つ保育者の持てる音楽的な知識で充分可能な編曲の基本を学ぶこととした。

【開催日時】

平成 27 年 9 月 5 日（土）

【指導の実際】

5 歳児 20 人による「森の音楽家」譜例①を設定して、編曲の実際を段階的に指導した。

使用する楽器については以下の様に設定してみる。
鍵盤ハーモニカ 6 人／木琴 6 人／タンバリン 2 人／カ

スタネット 2 人／鈴 2 人／ベル 2 人。楽器の割り当て人数は、出来上がった演奏にも大いに影響を与えるので注意が必要である。メロディー楽器は音量を考え人数を決定することが重要となるし、打楽器類は多すぎると雑音の原因となるので、その数には十分な配慮が必要である。

（Ⅰ）メロディー楽器の編曲を段階的に行う。

1. 譜例①が演奏できた段階で、オクターブを分けて演奏してみる。（譜例②）

オクターブでメロディーが動くことによってメロディーに響きが生れる。これだけの事で、音楽の表情は素晴らしくなる。しかも、子ども達にとってはオクターブ上（または下）で弾くだけの事でさほど困難ではないであろう。オクターブの分け方は、この場合、低音部 4 人、高音部 2 人とした。一般的に高音部が少ない方が安定した効果的な響きとなる。

2. メロディー楽器を交互に演奏させる。譜例③
繰り返しごとに楽器を変えて演奏することで、より複雑な表現が可能になる。また、フォルテやピアノに合わせて楽器を変えてみるのも効果的である。

3. メロディーと同じリズムで簡単なハーモニーを付けてみる。

ハーモニーの付け方は様々であるが、ここでは主としてメロディーの 3 度下を演奏する。譜例④
#F が出てくるとなど、少し難しいかもしれないので、十分にメロディーが演奏できるようになってから、余裕のある子どもに挑戦させる程度にすることが望ましい。この場合（Ⅰ）－1 のオクターブ別は人数の関係で行わない。



4. ハーモニー楽器によって効果的なハーモニー感を出す。

2 つのベルで和声音のひとつを演奏する。この場合、G メイジャーの和音では G の音を、D メイジャーの和音では D の音を演奏する。根音のみを選択する。譜例⑤ 音楽表現の幅が広がり演奏が色彩的に変化する。勿論、根音以外の第 3 音、第 5 音の和声音の使用も可能であるが、ここでは取り上げない。

（Ⅱ）リズム楽器の編曲。譜例⑥

1. もっとも基本となる強拍のリズムをタンバリンで演奏する。

メロディーを口ずさみ、宴会の手拍子感覚で一拍ごとに打ってみる。強拍を強調することにより、曲全体が安定した感じになるが、常に強拍が存在すると音楽がマンネリ化するので、曲想に合わせて強拍を打たない部分を作ることが望ましい。

2. 強拍に対応した弱拍のリズムをカスタネットと鈴で演奏する。

いわゆる相手の手のリズムで、音楽全体に活気を与える重要なリズムである。基本的には、強拍の裏拍を打つのが自然であるが、弱拍も常時打つとその効果を失うので、曲想に合わせて変化させることが望ましい。

3. 強拍と弱拍の担当楽器については、一般的に低く音量の豊かな楽器を強拍部に、高く軽い音量の小さい楽器を弱拍部にする。

（Ⅲ）ピアノパートの作成

子ども達の演奏をリードする意味において、保育者が担当することが原則である。

練習などにおいては右手部分でメロディー、左手部分で和音を弾いて正確なテンポ感を伝えることが望ましい。ただし、子どもたちの演奏の完成度が上がってくれば、メロディーの無い完全な伴奏楽譜で演奏したほうが、効果的な演奏が期待できる。譜例⑦ その際の要点は下記の様になる。

1. 基本的にはピアノ伴奏の強拍、弱拍のパターンが（Ⅱ）の構造と同じに成るように留意する。

2. 左手に強拍部分を右手に弱拍部分を配置する。

3. 基本的に左手は和音の根音を弾く。実際の楽曲では、根音以外の音を使用することが多いが、ここでは取り上げない。

4. 右手の和音は原則として「共通音は同一声部に保留する」こと。G メイジャーコードと D メイジャーコードを連結する場合、共通音は D 音であることに留意して音を構成する。これらを理解することによって、新たな編曲の可能性が広がる。

（Ⅳ）バス・パート作成 譜例⑦の⑧

バス音は、ピアノの左手部分をシンセサイザーなどで重複して演奏する。

原則的には、保育者が担当することが望ましく、正確なテンポで全体をリードすることによって、安定した深みのある演奏が可能になる。

【その他の講座内容】

講習の後半は、「森の音楽家」に続いて、「ミツバチマーチ」を教材に編曲法を学習した。上述（Ⅰ）－3 の項目以外は、ほぼ同じ要領で学習した。詳細については、紙面の関係で省略した。

保育者ワークショップ

新聞紙ボールで遊ぼう

仁愛女子短期大学 講師 出村 友寛

◆講座要項掲載内容◆

新聞紙で作ったボールを利用し、「投げる」、「当てる」、「捕る」といったテーマに基づき、「楽しく、保育内で教えられる効果的な指導」について考えていきたいと思います。

◆開催期日◆

平成 27 年 11 月 14 日 (土) 13:30 ~ 15:00



◆開催内容◆

1. はじめに

日本の子ども達の体力、運動能力は昭和 60 年頃から平成 10 年頃まで低下し続けてきました。その後、学校における様々な取り組みの効果の成果が表れ、低下に歯止めがかかり、現在、回復傾向にあります。しかし、ボール投げに関しては未だに回復傾向が認められず、子ども達のボール遊びに対する興味関心も以前に比べ薄れていることが報告されています。

ボール遊びに興味を示さないと、ボールに関わる遠投能力、正確投、捕球能力も、当然、発達せず、就学後の体育におけるボール運動でも苦手意識を持つことに繋がります。球技種目が多くある、運動・スポーツへの関心も持てず、不活発な人生を歩む危険性も高くなります。そうならないためには、幼少期からボール遊びに興味を持たせることが大切であり、幼児期から

「上手くできるようになった」「ボール遊びは楽しい」という感覚を成功体験から感じ取らせ、関心と有能感を高めていく必要があります。

そこで、幼児の「ボールを投げる」「ボールを当てる」「ボールを捕る」「ボール遊びに興味を持つ」といった包括的なテーマに基づき、『誰でも簡単に楽しく、保育内で教えられる効果的な指導』を科学的に追求したプログラムについてハンドブックをもとに紹介します。

2. 新聞紙ボール、投球マットを作る

新聞紙ボールの作り方

【準備するもの】

新聞紙 (大判: 3 面分)、布テープ

【小ボールを作る】

1. 新聞紙の大判 1 枚を丸める
2. 新聞紙が全て隠れるまで布テープを貼る。

※ 布テープは 20cm 程度の長さに切って少しずつつ張り重ねる。

【中ボールの作り方】

1. 小ボールと同じように新聞紙の大判 1 枚を丸め、その上からもう 1 枚大判を包みこむように丸める。
2. 小ボール同様、新聞紙が隠れるまで布テープを貼りつける。



<譜例>

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧ Bass 譜面

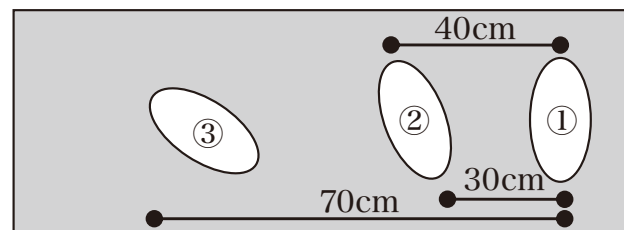
投球マットの作り方

【準備するもの】

段ボール（30cm×90cm）、油性マジック

【投球マットを作る（右利き用）】

1. 段ボールの片端中央付近に右足（図①）を描く。
2. 右足（図①）から子どもの肩幅より少し大きめの間隔をとった位置に左足（図②）を描く（つま先がやや左に開いたように）。
3. 左足を1歩踏み出した位置に足先を大きく開いたもう1つの左足を描く（図③）。



* スポンジマットを使って作ると滑らず便利

* 実際に足の位置が視覚的に見えるので、どのように足を踏み出せばよいか分かりやすい。



3. プログラムの体験

【主なポイント】

- ・ 投球腕と反対側の足を前に出して構える。
- ・ 上手投げで斜め 45 度の投射角で投げる。
- ・ 非投球側の足を前にステップして投げる。
- ・ 横走りをしてから勢いをつけて投げる。
- ・ 狙った的にめがけて投げる。
- ・ ボールキャッチのタイミングを掴む。
- ・ ペアでキャッチボールができるようになる。

などのポイントをステップアップさせながら確認しつつ、「投げる」「当てる」「捕る」プログラムを体験していきました。運動量も豊富で最後の方は皆さん少し疲れた様子でしたが、とても楽しそうにボールを投げていました。



当日ご参加頂いた方々からは、「ただ投げるだけでなく、きちんとステップをふんで投げることでこんなにも違ってくるということを身をもって体験できてよかったです。」「新聞紙ボールという手軽に作ることもできるもので楽しく体を動かす遊びをたくさん知ることができた。」「実際に自分たちが遊びをやることで分かりやすかった。」など色々な意見を頂きました。

【引用参考文献】

- ・ 春日晃章：幼児の投げる、捕る、当てる動作が大きく向上するための指導プログラムハンドブックーボール遊びが好きになるようにー。笹沢スポーツ財団（非売品）

新人保育者スキルアップ講座

仁愛女子短期大学 幼児教育学科

本学幼児教育の卒業生の多くは、幼稚園や保育所などで、幼児教育・保育に携わっています。学生時代とは異なり、責任が伴う現場の保育者としての1年目は、喜びや楽しみよりも、悩みや苦しみの方が大きいかもしれません。当センターでは、そのような卒業生が新人保育者としてさらに力を発揮していけるように、保育実践能力の向上と同期生との情報交換を目的として、毎年夏に、前年度の卒業生を対象としたスキルアップ講座を開催しています。今回も、平成27年3月に卒業した新人保育者31名が参加しました。

日 時／平成27年7月19日（日）13：00～16：00

場 所／仁愛女子短期大学

内 容／①実技講習

テーマ：新聞紙で遊ぼう

講 師：香月 拓（本学教員）

②分科会

テーマ：友人と語ろう

担 当：本学教員

【実技講習】

今回は、本学の専任講師で、おもちゃインストラクターの資格を持っている香月拓先生から新聞紙を使った様々な遊びについて実践しながら学びました。



「今まで保育中にも新聞で遊んだことがあったけれど、改めて色々な遊び方を知ることができ勉強になったし自分も楽しむことができた。」「簡単に様々なおもちゃができたので保育に生かしたいと思った。」などの感想がありました。



【クラス分科会】

2年間をともにしたクラスの仲間、在学時にクラスアドバイザーだった先生やお世話になった先生と、お互いの近況を報告し合いました。「自分が悩んでいることを聞いてもらい、アドバイスを聞き少しすっきりしました。来てよかったです。」「他の子も同じようなことで悩んでいたんだなあと分かって少し頑張ってみようと思いました。」などの感想がありました。



（文責：出村友寛）

Microsoft Excel 基礎講座・応用講座

仁愛女子短期大学 情報メディア教育支援室

(1) 活動方針

情報メディア教育支援室では福井ライフ・アカデミーと連携し、本学の夏休み期間中に情報系の講座を開講しています（例年9月初旬）。この講座は、本学の学生や教職員に加えて一般の方も対象です。この講座では、一般の方にもソフトウェアや情報機器についての用と・使い方を知ってもらうことが目的です。

昨年度は、表計算ソフト「Excel」の初心者向け講座と、タブレット「iPad」の初心者向け講座を行いました。本年度は少し内容を変え、「Excel 基礎講座」と「Excel 応用講座」の二つを行いました。Excel については例年行っていましたが、一日だけではやや取り扱う内容が少なく、実用的な範囲をカバーできなかったため、応用講座も開催することにしました。

(2) 取り組みと成果

Excel 基礎講座を2015年9月6日（日）に、Excel 応用講座を同年9月13日（日）に行いました。時間は両日とも9:00～16:00で、それぞれ参加者は15名と9名でした。いずれも一般の方です。

Excel 基礎講座は、例年通りの内容としました。Excel の基礎から学んでもらい、家計簿など普段の生活の中でExcelを活用してもらうことを目的にしました。データの入力方法、数式・関数の入力方法、書式の変更方法、グラフの書き方といった、Excel 操作の一連の流れについて説明を行いました。受講者の方には実際にExcelの操作を練習してもらい、そのあとに問題を解くといった流れで進めていきました。例年範囲がすべて終わ



9/6（日）Excel 基礎講座の様子

らないため、範囲を少なくしました。

Excel 応用講座は、やや高度な内容を取り扱いました。住所録等のデー

タベースの基礎的な取り扱いや、入力時のデータ制限など、実用的な表を作れることを目的としました。具体的にはテーブル（並べ替え、フィルタ）、入力規則、関数などを取り扱いました。進め方は基礎講座と同様です。

(3) まとめと今後の課題

昨年度課題とした講座のテーマについては、少し改善ができました。Excel に焦点を絞り「基礎」と「応用」について行うことで、Excel についてより深く理解していただけたと思います。講座後に調査したアンケート結果でも、好評を得ることができました。参加者については、昨年度よりやや増加しました。今年度は例年行われていた幼稚園教諭向けのパソコン講座を行われなかったことも原因の一つだと思われます。実際、幼稚園教諭の方も数名参加していただきました。

今後検討すべき内容としては、講座の開催日数が挙げられます。開催日数が2日間の場合、テーマを二つにすると内容がやや薄くなり、一つにするとさまざまな要望に対応できなくなります。開催日数を増やして充実を図ることが課題です。今年度の参加者アンケートでも PowerPoint、Word への要望がありました。一人で講座を行っているため限界はあるのですが、今後検討していきたいと思います。

以上のように、今年度はやや内容の改善を行い一定の効果は得られたかと思います。しかし、内容、開催日数など改善すべき点もまだまだあると思われます。今後もさらに参加者の方に満足していただけるよう、改善をしていきたいと思っています。



9/13（日）Excel 応用講座の様子

地域連携

森田地区まちづくり協議会と
仁愛女子短期大学との連携事業報告

地域活動実践センター長 重村 幹夫

「森田地区まちづくり協議会と仁愛女子短期大学との連携に関する協定」が平成22年8月30日に締結されました。この協定に基づいて、平成27年度も相互に連携・協力して様々な事業を展開してきました。

1 森田・仁愛女子短期大学連携協議会

「第6回森田・仁愛女子短期大学連携協議会」が、平成27年6月12日、仁愛女子短期大学で開催されました。森田地区から安田寛自治会連合会会長他7名が、本学から禿正宣学長他7名が出席しました。



森田地区の出席者（自治会連合会会長：安田寛、同副会長：林進一、運営審議会委員長：横山芳樹、公民館館長：吉村公、文化委員会委員長：高木荘治、同副委員長：勝見祐昌、森田公民館主事：吉田智子）



仁愛女子短大の出席者（学長：禿正宣、副学長：水岸誠、学生部長：内山秀樹、事務長：吉川敏通、地域活動実践センター長：重村幹夫、事務：中村澄子）協議事項は、平成26年度に実施した連携事業の報告及び平成27年度実施予定の連携事業について行いました。

2 公民館と地域活動実践センターの事務打合せ

事務レベル協議が、平成28年1月28日に仁愛女子短期大学で開催されました。森田地区からは吉村公民館森田公民館館長、吉田智子公民館主事が、本学から重村幹夫地域活動実践センター長、内山秀樹教授、澤崎敏文地域活動実践センター主任、中村澄子センター事務が出席しました。打合せ内容は、平成27年度の振り返りと平成28年度実施予定の連携事業等について話し合われました。

3 継続事業

本年度の継続事業には、もりた夢駅（7月20日）、もりたエコキャンドル（7月25日）、森田地区文化祭でのパウンドケーキの販売（10月18日）、もりた夢市でのパウンドケーキの販売（11月1日）等があります。これ等の事業の詳細については、福井市との包括連携事業の項をご覧ください。

これ等の他、森田駅の夢ギャラリー森田に作品展示を実施しました。本年度は新たに附属幼稚園児の作品展（9月1日～30日）を行ないました。



『仁愛女子短期大学 附属幼稚園 年長組 作品展』

また、本年度も昨年度に引き続いて、全学科、専攻の展示を行いました。生活環境専攻（5月1日～29日）、幼児教育学科（7月2日～31日）、生活情報専攻（10

月2日～30日)、食物栄養専攻(3月1日～30日)。サークルでは、漫画研究サークル(1月12日～29日)。

また、「英語であそぼ」講座を本年度も行ないました。これは昨年度、本学生生活情報専攻野本尚美講師により、森田公民館にて開始したものです。本年度は、会場を公民館だけではなく、児童館まで広げ、対象学年、回数を増やし、野本講師と生活情報専攻学生5名にて実施しました。森田公民館(9月5日)16名、第2児童クラブ(9月8日)30名、第1児童クラブ(9月10日)35名、すみれ児童館(9月11日)51名と多くの児童の参加がありました。



『第2児童クラブにおける「英語であそぼ」講座』

また、森田地区の方への本学附属図書館の利用サービスも実施しました。本年度は、利用者証の申請者数13名、来館日数8日、来館人数30名、貸出冊数21冊でした。



『図書館利用サービスの説明(九頭竜大学見学時)』

4 森田地区(九頭竜大学)の本学キャンパス見学会

森田公民館では、教育事業の一環として高齢者学級の九頭竜大学を企画しています。本年度はその一環として、7月15日に九頭竜大学の本学キャンパス見学

会を実施しました。授業見学、図書館見学、図書館利用サービスの新規登録、学食体験等を行いました。



『九頭竜大学見学会における授業見学』

5 森田地区(九頭竜大学)の仁短祭模擬店出店



『九頭竜大学の仁短祭模擬店出店』

九頭竜大学の方12名による、本学大学祭への模擬店出店が10月17日に実施され、本学学生との相互理解交流が図られました。

また、福井市公民館運営審議会九頭竜ブロックの9名が、「福井市運審連・市公連 合同研修会」の一環として、その様子を見学に来られました。

6 森田公民館ホームページリニューアル

生活情報専攻田中洋一教授とゼミ生3名による森田公民館ホームページリニューアルが進められました。これにより、ホームページ更新時期の適正化やソーシャルメディアの活用による情報発信、アルバムページや運用マニュアルの作成が図られます。

福井市との包括連携事業

福井市との包括的な連携に関する協定締結

地域活動実践センター長 重村 幹夫

平成27年5月18日、福井市役所庁議室において、福井市と本学が「福井市と仁愛女子短期大学との包括的な連携に関する協定書」を交わしました。これは、市の施策の推進及び地域の課題解決、まちづくり、食と健康、子育て支援等の分野において相互に協力し、地域の発展と人材育成に寄与することを目的とするものです。

1. 締結に至った背景

本学は、地元森田のご理解とご協力の元に開学し、以来様々な場面で活発な交流が行われてきました。平成17年には本学生活環境教員と学生が森田地区の将来ビジョンの策定支援を行い、生活科学科教員と学生が具体的なまちづくり活動を支援してきました。このような交流を重ねた結果、双方の課題や期待が明らかにされ、平成22年に「森田地区まちづくり協議会と仁愛女子短期大学との連携に関する協定書」の協定締結に至りました。

このような活動を踏まえ、本学においては活動地域の拡大、活性化を目指すため、福井市との協定締結を進めていくことになりました。締結時期は、本学が50周年を迎える平成27年度を目標としました。協定締結のため、福井市、本学双方からなる連絡協議会による事務レベル協議を平成26年11月27日、平成27年1月30日、2月20日に実施しました。協議の中で、双方の各部局から上がった要望の調整を行ない、27年度の実施予定事業や、協定書の内容の検討を行いました。

2. 協定締結の様子とその内容

協定の締結は福井市役所庁議室において行なわれました。福井市からは、東村市長、山田副市長ら4名が、本学からは、禿学長、水岸副学長ら4名が出席されました。

双方の挨拶、歓談のあと、東村市長と禿学長が協定書にサインし、握手を交わしました。東村市長は、「短大の持っている専門知識や研究機能を市政に生かして、活力ある地域社会の形成につながれば」と期待を述べられました。禿学長は、「女子学生ならではの視点を持ち、連携活動に参加することは社会人の基礎づくりになる。より良い社会環境の構築にもつながり意義がある」と話されていました。

3. 今後の連絡協議会運営について

協定締結後、連絡協議会による事務レベル協議を9月と2月頃の年2回実施することにしました。27年度は、継続事業として、「フクイ夢アート関連事業」、「地域の誇り推進事業」、「市民憲章ホームページ作成事業」等が、新規事業として、「ボランティア団体等のWEBサイト制作」、「学生アンケートによる福井志向に関する調査・分析事業」、「輝く女性の未来予想図事業」等を実施しました。詳しくは、福井市との包括連携事業の各項をご覧ください。



**女子学生の力施策に
市、仁愛短大と連携協定**

福井市と仁愛女子短大のは福井工大、福井大に
は18日、地域社会の持続 続き3例目。協定書によ
的な発展に向け、双方の ると連携項目は▽地域振
知的・人的・物的資源を 興を担う人材育成▽まち
有効活用するための包括 づくり▽食と健康▽子ど
連携協定を結んだ。食や も・子育て支援―などで
健康、子ども・子育て支 期間は2年。本年度は輝
援などの専門知識や、若 く女性の未来予想図事
い女性の視点など仁愛女 業」「まちづくりお助け
子短大の特性を市の施策 隊派遣事業」「食育推進
に反映させる。 事業」などの共同事業を
市と大学が協定を結ぶ 予定している。

市役所で調印式が行わ
れ、東村新一市長と禿正
宣学長が署名、押印して
握手を交わした。東村市長
は「短大の持つ持っている専
門知識や研究機能を市政
に生かして、活力ある地
域社会の形成につながれ
ば」と期待を述べた。禿
学長は「女子学生ならで
はの視点を持ち連携活動
に参加することは社会人
の基礎づくりになる。より
よい社会環境の構築にも
つながり意義がある」と
話していた。(近藤洋平)

福井新聞 平成 27 年 5 月 19 日



協定締結の様子

〈協定書の内容〉

福井市と仁愛女子短期大学との包括的な連携に関する協定書

福井市と仁愛女子短期大学は、相互の包括的な連携に関し、次のとおり協定（以下「本協定」という。）を締結する。

（目的）

第1条 本協定は、福井市と仁愛女子短期大学（以下「両者」という。）が、包括的な連携の下に、相互に協力し、地域社会の発展と人材の育成に寄与することを目的とする。

（連携事項）

第2条 両者は、前条の目的を達成するため、次の事項について連携する。

- （1）市の施策の推進及び地域の課題解決に関すること。
- （2）地域振興を担う人材の育成に関すること。
- （3）まちづくりに関すること。
- （4）食と健康に関すること。
- （5）子ども・子育て支援に関すること。
- （6）その他、目的を達成するために必要な事項に関すること。

（連絡協議会）

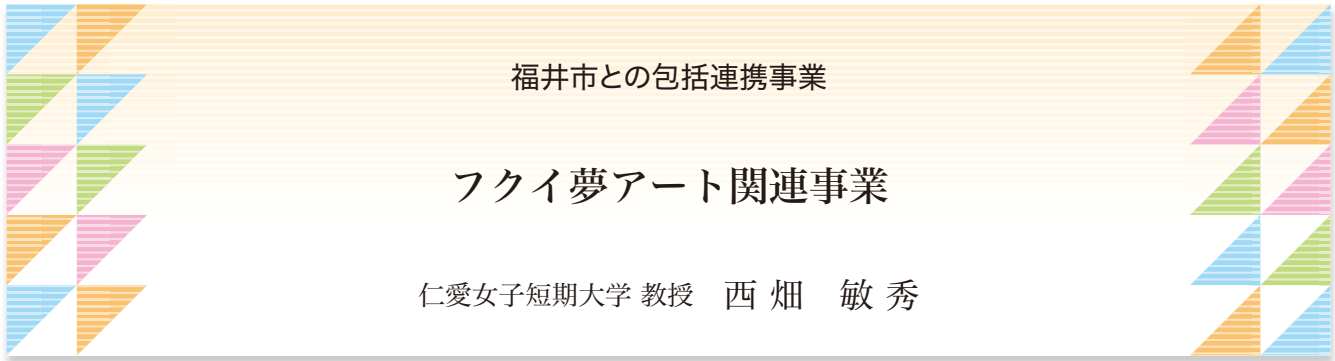
第3条 両者は、連携事項の円滑な推進を図るため、連絡協議会を設置する。
2 連絡協議会に関し必要な事項は、別に定める。

（有効期間）

第4条 本協定の有効期間は、協定締結の日から2年間とする。ただし、両者のいずれから異議の申し立てがない場合は、さらに2年間有効とし、その後も同様とする。

（その他）

第5条 以下略



福井市との包括連携事業

フクイ夢アート関連事業

仁愛女子短期大学 教授 西畑 敏秀



毎秋福井市中心市街地で開催される、フクイ夢アート 2015 に
仁愛スモールデザインプロジェクト（JSD）として参加しました。

アートの力で福井駅前を活性化することを狙ったイベント『フクイ夢アート 2015』に生活環境専攻の学生たちが今年も参加しました。10月4日（日）～25日（日）までの期間中、ワークショップ、ギャラリー展示、パフォーマンス等のイベントを行い、運営・管理に協力しました。

センター機能をかねた夢アートステーションでは、夏に西武福井の依頼で作成したオリジナルデザインのマイメロディを展示。多くの来場者の注目を集めました。最終日にはイベントの締めくくりとして、ハロウィンイベントを開催。本格的な仮装をした1・2回生がお菓子を配りながら駅周辺のまちなかに出沒。今年は話題の作品の一つ、ビッグベンチと一緒に駅前を鼓笛隊とパレードして歩き回るというパフォーマンスを、昼の部と夜の部と2回行い、イベントのフィナーレを盛り上げました。

今年の仮装のテーマは「なりきりモンスター」。各自が自分でデザインした衣装で個性豊かなモンスターになりきりました。



ビッグベンチと一緒にまちなかをパレードし
イベントを盛り上げました。



西武福井のサンリオフェアで作成した
約70体のマイメロディを展示。

地域の誇り推進事業（地域連携開放講座）

仁愛女子短期大学 教授 内山 秀 樹

●森田夢駅～夏物語

自分たちで企画を実行することを通じて、コミュニケーション力を高めたり、社会の評価をいただく、すなわち、「地^{🗨️}から学ぶ」ことを目的に、今年も「もりた夢駅～夏物語 2015」に授業の一環として学生たちが参加しました。

JR 森田駅の駐輪場壁画の原画を本学学生がグループに分かれて考え、森田地区文化委員会で審査。採用案を7月20日（月）に森田地区在住のイラストレーター THERTEEN さんと連携して、地元の子どもたちも参加し、約50名でペイントしました。昨年に引き続き、今年は秋と冬を描き、壁画が完成しました。



完成した JR 森田駅駐輪場壁画



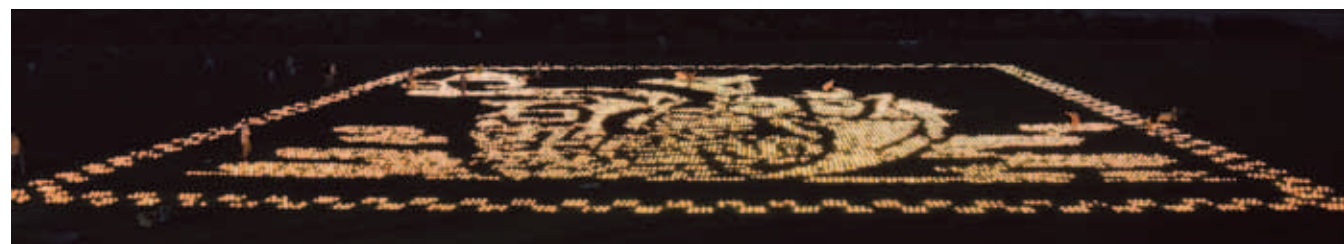
完成！！お疲れ！



最優秀の野村さん



点火作業の様子



九頭龍川河川敷に浮かび上がった戦国武将脇屋義助

森田公民館Webサイトのリデザイン

仁愛女子短期大学 教授 田中 洋 一

福井市と仁愛女子短期大学との包括連携協定に伴う事業の一つに「ボランティア団体等のWebサイト企画・制作」を予定していましたが、2015年度は森田公民館Webサイトのリデザインをすることにしました。この「リデザイン」とは、既存サイトの見た目を改善するだけでなく、運営方法等の計画を見直すことも含めています。福井市森田公民館から依頼されたWebサイト・リデザインの目的は下記の2つです。
①多様な人に多くの情報を届け、閲覧者を増やすこと。
②Webを通じて地域活性化を図ること。

生活情報専攻田中ゼミ生3名が森田公民館Webサイト・リデザインを担当することになり、福井市等の公民館Webサイトやソーシャルメディア（FacebookやTwitter）を活用した公的機関Webサイトを調査し、提案企画をまとめました。5月～7月にかけて月1回程度行った、森田公民館主事の方やWebサイト更新担当者の方とのミーティングを通して、要望や課題を抽出しました。要望は、主催事業の活動を写真で閲覧してもらうため、簡単に更新できるアルバムの作成があたりました。課題は、下記の2つがあたりました。
①更新担当は公民館主事ではなく、地域のシニアボランティアであること。
②月間情報の更新日は毎月10日くらいであること。



Web サイト更新担当者とのミーティング

各団体から情報を収集するタイミングを月初めから月末へ、広報紙の運用スケジュールを変更することにより、課題②を解決し、月初めには月間情報を更新可能としました。その他、要望や課題①を解決するために下記3点を行いました。①ソーシャルメディアを活用したWebサイトを制作しました。②ジャストシステム社のホームページ・ビルダー20を用いたアルバムやトップページを制作しました。③森田公民館主事の方に対して運営方法（PC操作等）を指導しました。運営マニュアルも制作しています。①と③の例としては、森田公民館のFacebookとTwitterアカウントを作成し、11月に主事の方へ操作のレクチャーを行いました。

2016年度からは、パソコンボランティアサークルが引き継いで、更新等を行う予定です。



主事の方への操作指導



Facebook ページ

総合ボランティアセンター整備事業

仁愛女子短期大学 教授 田中 洋一

福井市男女参画・市民協働推進室総合ボランティアセンター開設準備室の依頼により、ボランティア及び福井市ボランティアネットに関する座談会を3回（7月に2回、9月に1回）開催しました。そのうち2回は田中ゼミの学生とボランティアに関する座談会を生活情報専攻2回生の科目「専門演習」中に行いました。2015年度の田中ゼミは、11名3グループからなり、全員がボランティアに関わっています。1回目は7月1日（水）に「ボランティアに対するイメージ」というテーマのもと、ボランティアの経験等についてワールドカフェ方式で話し合いをしました。2回目は9月30日（水）に「大学ボランティアサークル間の連携事業」というテーマのもと、話し合いをしました。もう1回は7月14日（火）の放課後に、田中が顧問を務めるパソコンボランティアサークル（以下、パソボラと記す）の学生と「福井市ボランティアネット」に関する座談会を行いました。この日は、Webサイトのユーザビリティ（使いやすさ）やイメージ等について話し合いをしました。

これらの座談会の対話から、ハピリンフェスにおける総合ボランティアセンターブースのお手伝いをする

福井市ボランティアネット (<https://www.fukui-volunteer.net/>)

ことになりました。10月4日（日）10時～17時、福井駅前電車通りで開催されたハピリンフェスですが、田中ゼミから7名の学生が参加し、「動き出す！？塗り絵アプリ体験」「親子で作ろう、バルーンアート講習会」のブースを担当しました。また、仁短ボランティア活動紹介として、「仁短パソボラ」「福井市殿下地区PR隊」のポスター展示を行いました。

ゼミ生が担当したブースは、子どもたちで終日賑わい、用意した何百個ものバルーンが足らなくなるほどでした。子どもたちは、自分が塗った絵がタブレットの中で動き回るAR（Augmented Reality：拡張現実）技術に驚いていたそうです。

学生たちも、これらの活動を通して、多くのことを学んだようです。



学生アンケートによる「福井志向」に関する調査・分析事業について

仁愛女子短期大学 講師 野本 尚美

大学生が進学や就職についてどのような意識を持ち、どのような形で影響を受けて進路の決定を行うのかを明らかにするという目的で、「福井志向」に関するアンケート調査が市内の3大学（福井大学、福井工業大学、仁愛女子短期大学）にて実施されることになり、本学では野本ゼミ生3名がこの事業に参加させていただきました。

2015年6月に福井市総務部総合政策室の担当者の方々とお会いし、アンケートの実施目的や内容についてお話を伺いました。福井市からご提案いただいた3大学共通の設問だけでなく、本学独自の設問も加えたのち『仁愛女子短期大学学生アンケート』を作成しました。7月1日のMHにて、クラスアドバイザーの先生方のご協力を得てアンケート調査を実施し、510名の在学生に回答してもらいました。

その後、専門演習の時間や夏期休暇中を利用してアンケート集計結果を分析し、福井市に対してどのような施策の提案を行うかゼミ生たちと話し合いを重ねました。10月14日、担当者の方々と会議において『「福井志向」に関する調査・分析報告書』を提出させていただきました。



10月14日の会議の様子

若い世代を福井市に定着させるための施策として①高校での進学支援活動を増やすこと、②高校生だけでなく保護者に対しても地元で進学する利点をアピールすること、③福井の大学や短大における資格取得制度を充実させること、④地元企業の知名度を上げる活動を増やすこと、⑤地元で専門的な職業に就きたい若者の就職活動を支援すること、⑥子育て世代の勤務体制を工夫すること、⑦福井駅前を活性化させること、⑧大型ショッピングセンターなどの商業施設を増やすことを私たちが市に提案させていただきました。

11月2日には福井市役所にて3大学担当教員合同会議が行われ、学生アンケート結果のほか中高生を対象としたアンケート結果や、市内企業へUIターン入社をした社会人に対するヒアリング調査の結果も参考にしながら、福井における若者の動向や今後の情報発信の仕方などについて話し合われました。

ゼミの学生達は最後にまとめた論文の中で、「私たちも県外への進学や就職を一度は考えたことがあるので、身近に感じた研究だった。私たちは福井が好きなので、これからの福井を担っていく若者が減少してしまうのは残念である。これからもよりよい福井になるように、私たちも出来ることがあれば協力していきたい。」と書いています。この研究を通して得られた貴重な経験をもとに、卒業後もぜひ若者の視点から情報を発信し、より魅力的な福井市を創造してほしいと思います。

福井市との包括連携事業

かえりたくなるまち促進事業

仁愛女子短期大学 准教授 澤崎 敏文

福井市では、福井県移住定住促進機構などと連携して、東京や大阪にて移住・定住の相談会に出展するなど、移住・定住の後押しを強化しています。そのためには、U・Iターンに関心がある相談者に福井市の住みよさを効果的にPRする必要があります。そこで、このような広報・イメージアップ戦略を検討するうえで、今どきの若者、学生目線での「福井の住みよさ・暮らしやすさ」を本学の学生たちと考え、最終的には、移住・定住促進PR事業用パンフレットという形で情報発信していくというのがこの授業の目的です。

本事業における本学の役割は2つあります。

1. 基本コンセプトの設計

まず一つ目が、パンフレットの基本コンセプトとなるアイデアを学生たちで考えることです。10月13日、14日に生活情報専攻1回生対象の「コミュニケーションI」の授業にて、福井市の担当者に来ていただき、移住・定住促進施策についての講義を受けました。

この後、以下の手順で5週に渡ってワークショップを実施しました。

○第1回：全国のUターン・Iターン施策を知る

福井県以外の移住・定住促進事業の情報を探して、自分が魅力的に感じた街、そして、なぜそう感じたのかを考えました。

○第2回：福井市をPRするために必要なことを考える

ワールドカフェ方式のワークショップを実施。県外の人々の目線で福井が魅力的だと感じるポイントを議論しました。

○第3回：パンフレットとして必要なコンセプト

パンフレットとして何を伝えるか、どう伝えるかをまとめました。

○第4回：パンフレットの中身を考える

これまでの議論で絞り込んだコンセプトを中心にその中

身を考えます。グループに分かれて話し合った後で、個人で福井市を紹介する内容を集約しました。

○第5回：パンフレットの構成を考える

これまでの議論から構成を考え、それらにふさわしい「言葉」やストーリーを組立てます。各自がパンフレットのサンプルを作ってみました。

最後に、パンフレットの方向性やコンセプトについて発表を行いました。最終的に出てきたのが、将来福井に住んでもらえるかもしれない「未来の福井人へ向けた手紙」というコンセプトです。ネットや携帯で簡単に情報が手に入り、メール等で気軽に情報交換ができる今だからこそ、大事なメッセージは手紙として伝えよう、というコンセプトです。

2. パンフレットのデザイン、作成

次に、2つ目の役割となるデザイン・パンフの作成です。生活情報専攻で議論されたPR案をベースに、必要な項目等を精査し、生活環境専攻の西畑先生を中心に広報用パンフレットのデザインを作成し、最終的なパンフレットへと仕上げました。



学生にとっては、自分たちが考えたアイデアが現実のパンフレットとして形になるだけでなく、このような長い議論を

踏まえて一つのプロジェクトが進んでいくということを知るいい機会になりました。また、現実の地域の課題に真剣に取り組むことで、今まで知らなかった地域の魅力を再発見できたのではないかと考えます。今回のプロジェクトを通して、学生の大きな成長を感じました。

福井市との包括連携事業

輝く女性の未来予想図事業
「地元の魅力講座」「ライフプランセミナー」

仁愛女子短期大学就職支援課 課長 荒井 一雄

本事業は、福井市との包括連携事業の一環として、若い女性に福井市で就職や仕事をする事への意欲を高め、安心して子育てなどができる利点などを理解し、定住への意識向上を図ることを目的に就職支援課が男女参画・市民協働推進室と連携して開催したものです。初年度に当たる今回は次の二題の出前講座を開催しました。

【地元の魅力講座】

11月25日（水）開催 受講生：2回生100名

「福井を舞台に働くということ」

講師：(株)ウララ・コミュニケーションズ

取締役 友廣 みどり 氏

月刊「ウララ」の編集に25年携わり、編集者の目を通して地元福井を多方面から切り取ってきた講師の仕事観について講演いただいた。特に仕事と家庭との両立について、職場の同僚や知人へのインタビューや演者自身も二人の子を持つ親の立場から話を展開された。

講演では「高校を卒業した時は県外に出たいと思っていたが、県内の企業に就職した。その時は井の中の蛙でコンプレックスを持っていた。結婚して再就職することになった時の条件は夫にも協力をしてもらうことだった。福井の環境の良さ、住み易さは申し分ない、その福井を舞台にして快適に働くには、仕事に対する価値観や子育ての価値観について相談できることが大切」と述べ、「福井は自分のやりたいことが叶えられ



11月25日開催『福井の魅力講座』

る県、そのためには何をやりたいか、どういうことをやりたいかを考えることで先の人生に繋がっていく」と福井の魅力を語られました。

これに対し学生は、「福井で就職、結婚等に関心を持ったか」とのアンケートで97%が就職・結婚等への意識が高まったと回答しました。

【ライフプランセミナー】

12月9日（水）開催 受講生：1回生181名

「～自分らしさをデザインする～」

今日からはじめる『輝くオトナの生き方』

講師：(株)ドリームワークス

代表取締役社長 山内 喜代美 氏

人生の中で仕事に関わる創造の部分、いわゆるキャリア・デザインを学生に分かりやすく説明し、そこから自分の生き方を創り出すというライフ・デザインについて講演いただきました。

講演の中では「幸せな人生を創り出すにはポジティブな考え方からの出発が大切。思考は行動を変え、行動は習慣を変え、習慣は性格を変え、性格は運命を変える。成果を出す人は、自分の考えや思考や習慣を変える事をする。今、企業が求めている人材はそのような人」と、自分が変化し続け、これからの自分の人生設計をする事の大切さを話された。

学生の反応は、99%が就職・結婚等への意識が高まったとアンケートで回答しました。



12月9日開催『ライフプランセミナー』

福井市との包括連携事業

食育推進事業（食育啓発重点事業）

仁愛女子短期大学 教授 牧 野 みゆき

福井市との包括連携事業のうち、食物栄養専攻では食育推進事業（食育啓発重点事業）に携わりました。

平成 17 年に「食育基本法」が制定され、「食育」という言葉を耳にすることが多くなりましたが、興味・関心を持つ人はそれほど増えていないのが現状です。また、「国民健康・栄養調査」や「福井県民健康・栄養調査」の結果から、野菜の摂取不足が懸念されています。そこで、もっと野菜を食べてもらおうと、野菜を使った「パパッと簡単レシピ集」を作成することになり、食物栄養専攻の 2 回生全員がレシピを考案しました。その中から厳選した料理を試作し、写真を撮影するなどレシピ集の作成に取りかかりました。それを福井市農政企画室がミニ冊子に仕上げてくれました。

10 月 4 日（日）に福井駅前電車通り特設ブースまちフェス会場内で行われた「第 6 回食育フェスティバル」の特別企画として「パパッと簡単料理レシピ紹介コーナー」が設けられ、それぞれの料理の写真にレシピを添えて展示されました。また、学生が道行く人たちにレシピ集を配布するなど、PR に努めました。

会場ではステージでのイベントもあり、学生も参加して盛り上げていました。

食育推進に少しでもお役に立てればと取り組んできた事業ですが、今後さらに関心を持っていただけるよう、地道に取り組んでいきたいと思ひます。



福井市との包括連携事業

市職員による学生への講義

仁愛女子短期大学 准教授 澤 崎 敏 文

生活情報専攻の 1 回生を対象に開講されている「コミュニケーション演習 I」の授業にて、10 月 13 日（情報 A クラス対象）、14 日（情報 B クラス対象）に、福井市総合政策室佐田さんをお迎えし、特別講義をしていただきました。講義のテーマは「かえりたくなるまち・福井へ U・I ターンしませんか」。そして、この講義は、その後スタートする「かえりたくなるまち促進事業」のパンフレット企画を実施するための最初のスタートアップでもあります。詳細はそちらのページをご覧くださいなのですが、学生は福井市の観光資源だけでなく、総合政策全般について知ることができました。普段、市役所といえば、市民課等の窓口業務は住民に直接かわりもあり、業務内容がわかりやすい場所でもあります。一方で、今回のように総合政策、特に、移住・定住等を担当されている部署では普段どのような活動をしているのか、市全体の総合政策というのはどういうことか、ということを知りやすい具体例などを添えて話していただき、学生も多くを学ぶことができました。

授業の後半では、「私が福井に住む理由」をテーマにペアワークを実施しました。そこでは 2 名一組になって以下のようなことが話し合われました。

1. あなたが、いま福井に住んでいる理由はなんですか
2. 将来、あなたが福井に住む理由はなんですか（または住まない理由）
3. 友人、知人、親戚など、身近な人が福井に住まない理由はなんですか

最初は、「福井は田舎だ」「親が住んでいるから」という消極的な意見が多かった学生も、議論が進むにつ

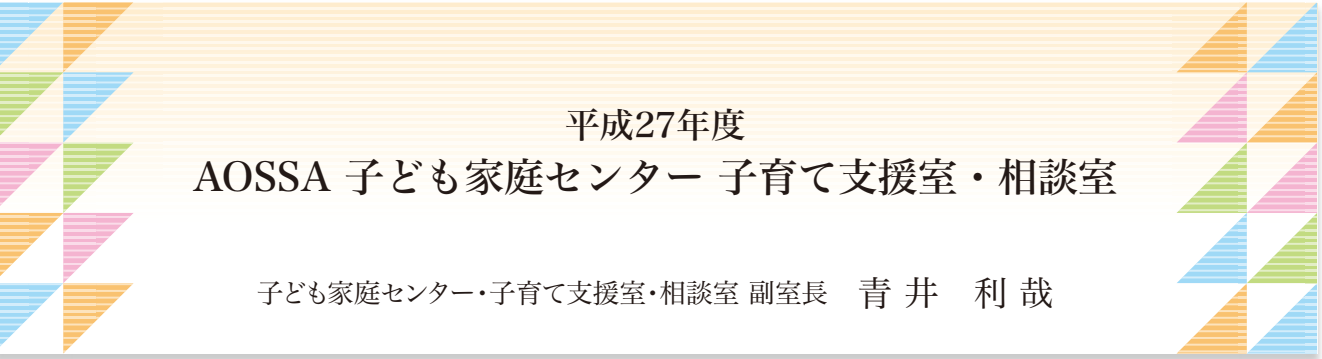


れて、「安全・安心」「自然が豊か」「生活環境が整っている」というように、客観的なものの見方に変わっていきます。学生にとっては、「あたりまえ」として住んでいる今の環境を、このように改めて問い直すことで、自分たちの住んでいる地域と他の地域、または、他の学生との違いを認識し、それらを深く考えるいい経験になりました。

生活情報専攻では、これまでも、様々な機会をとらえて、民間企業の経営者や地域活動されている方々、本学の OG などにゲストとしてお越しいただいていますが、地域全体の街づくりや行政施策を考えるという意味で、福井市職員の方から総合的・政策的なお話をお聞きする機会を頂けたことは非常に貴重だと感じています。

今回の授業をきっかけに、多くの学生に街づくりや地域活動について考え、参画してもらえたらと思います。





子ども家庭センター・子育て支援室・相談室（以下、センター）は、児童福祉法第6条の2に準拠した地域子育て支援拠点事業を行うとともに、子ども相談・女性相談等を行う相談室を併設しているセンターになります。センターは、地域の子育て中の親子の交流促進や育児相談を実施し、子育ての孤立感、負担感の解消を目的としながら、子育て家庭を地域で支える取組を行っています。このようなセンターは全国に約6,500カ所（平成26年度厚生労働省報告）ありますが、今後さらに1万カ所（中学校区に1カ所）の設置を目標として掲げ、重点的に取組が推進されていく予定です。

当センターは、福井市との委託契約が次年度で満期を迎えます。今年度で9年目を終えようとしていますが、着実に福井市周辺地域における地域子育て支援に従事してきました。子育て支援ボランティアの養成や、子育て支援関連団体との共同行事、仁愛女子短期大学幼児教育学科の学生やボランティアサークルと一緒にの児童虐待啓発運動、公立保育所への出張相談活動など、この実績は、子育て支援機能と相談機能が併設された当センターの特色であると思っています。全国的に見渡しても、このような活動を行っている地域子育て支援拠点事業は見当たりません。今後ますます地域社会が一丸となって子育て家庭を応援するために、虐待防止や育児不安の解消につながる産前産後からの早い時期の家庭への支援が必要不可欠となっていくものであると考えています。

表 1. 子育て支援室の利用者数

	世帯数 (世帯)	子どもの 延べ利用数(人)	総延べ利用数 (人)
H25年度	1,490	10,069	19,229
H26年度	1,499	9,242	17,657
H27年度	1,412	8,667	16,702

1. 平成27年度子育て支援室の実績

1) 子育て支援室利用数、小児科医師による相談開催状況

表1は、平成25年度から平成27年度（2月まで）の子育て支援室の利用数の推移です。総延べ利用数は、子どもの利用延べ人数と、その保護者の利用延べ人数を合算したものです。表2は、小児科医師による相談開催状況です。子育て支援室では、毎月2回小児科医師による相談会を実施しています。子どもの発育や病気などについて、病院へ行くまでもないけど、「専門的なアドバイスがほしい、ちょっと聞きたい」の声にこたえるような形で、福井市医師会の協力のもと開催されているものです。当番の医師が、子育て親にいろいろなテーマで話題提供をし、その後個別相談を実施しています。内容は、アレルギー、言葉の発達、夏の病気、薬について、夜泣きについて、予防接種、救急時の対応など、どれも身近なテーマです。

子育て支援室での体験学習は、仁愛女子短期大学の学生は毎年受け入れていますが、今年度は仁愛女子高校の学生の受け入れも始まりました。子育て親子からとても好評を得ています。

表 2. 子育て講座の開催回数と参加人数

	開催回数(回)	参加人数(人)
H25年度	20	465
H26年度	22	481
H27年度	21	404

表 3. 子育て相談室の相談対応実績

単位(件)

	子ども相談	女性相談	ママダイヤル	小計	専門相談計	(小児科)	(弁護士)	総合計
H25年度	813	610	624	2,047	187	(115)	(72)	2,234
H26年度	716	670	721	2,107	214	(141)	(73)	2,321
H27年度	557	763	378	1,698	151	(105)	(46)	1,849

2. 平成27年度相談室の実績

1) 相談室利用実績

表3は、平成25年度から平成27年度（2月まで）の相談室利用実績の推移です。利用実績数はすべて延べ件数で表しています。表中のカッコ内は、専門相談合計における内訳を示してあります。

2) 公立保育所出張訪問相談の実績

相談室では、日頃の保育や支援によっても改善等が認められず、対応に苦慮している事例（家庭支援ケース）について、保育者へ助言することを目的として、試行的に公立保育所へ出張相談を行っています。今年度は、優先的に4カ園12事例に対応しました。

3. 地域支援活動

10月24日に、仁愛大学子ども教育学科（石川先生にご協力いただきました）、子育て支援関連団体、福井市と協働して、学生によるオレンジリボン運動（児童虐待防止啓発運動）をアオッサアトリウム1階にて「こども笑店」の名称で開催しました。学生は、オレンジリボン運動の勉強会のため、福井市役所職員とのミーティングを事前に行いました。そこで学んだ内容を、ポスターにまとめ、子育て親子の目に留まるように掲示しました。また、子育て関連団体の催しも同時に行い、大変賑わいのある活動となりました（日刊県民福井にて記事になりました）。



小児科医師による相談会の様子



仁愛女子高校の体験学習の様子



児童虐待防止啓発運動（仁愛大学生による縁日広場）

多文化体験プログラム

ロッキーナ先生と「Englishであそぼう」講座

仁愛女子短期大学 講師 野本 尚美

2015年10月17日の仁短祭において『多文化体験プログラム ロッキーナ先生と「Englishであそぼう」講座』がF105 演習室にて開催されました。英語の歌やリズム遊びなどを通して英語に親しんでいただくことを目的として、昨年同様30分間の講座を2回実施しました。

一回目の講座(13:00～13:30)では、「野菜」をテーマにして様々な活動を行いました。まずは英語の歌“I like vegetables”を歌いながら、tomato, carrot, potatoなどの単語を学びました。

その後、私たち教員が八百屋さん役、子どもたちがお客さん役として、みなでお買い物ごっこを楽しみました。子どもたちにはお買い物用のお札が入った封筒を渡し、机の上に広げた数種類の野菜を買いに来てもらいました。はじめは英語で話すことをためらう子もいましたが、保護者の方々のご協力もあり、徐々に“Hello.” “Tomato, please.” “Thank you.”などの表現が子どもたちから多く聞かれるようになりました。お札がなくなったら“Money, please!”と言いに来て何度も買い物を楽しむ子や、私たちに英語で自己紹介をしてくれる子もいました。このお買い物ごっこを通して、子どもたちと英語を用いたコミュニケーションを楽しむことができました。



1回目の講座の様子



お買い物ごっこで使用したワークシート

二回目の講座(14:30～15:00)では、英語の歌“Wheels on the Bus”を歌いながら、体を動かしました。小さな子どもも保護者の方も、みんなで一緒に歌いながら open and shut, up and down など、生活の中で多く用いられる英語表現について楽しく学びました。

今後も歌やゲームなどを通して、英語や異文化をより身近に感じてもらえるような活動を実践していきたいと思います。



2回目の講座の様子

福井市まちづくりセンター「ふく+」の活用

仁愛女子短期大学 田中ゼミ & 澤崎ゼミ 卒業研究学外発表会

仁愛女子短期大学 教授 田中 洋一

仁愛女子短期大学生活科学学科生活情報専攻の卒業研究学外発表会として、田中ゼミと澤崎ゼミの合同発表会を2016年2月13日(土)13時～15時に福井市まちづくりセンター「ふく+」にて開催しました。昨年度は、「まな種18 with 仁短ゼミ発表」というタイトルで、「まなびの種プロジェクト(まな種)」として開催した合同発表会でしたが、今年度はグループ数も増えたため、仁短生だけの発表です。「まなびの種プロジェクト(まな種)」とは、自分がこれまで学んだことを5分間のプレゼンとして簡単に発表し、新しい学びの種を探します。まな種の場合、1グループにつきプレゼンテーション5分+質疑応答5分で交代しますが、今回は発表内容が多いので、1グループの持ち時間を質疑応答も含め15分としました。

生活情報専攻では、多くの企業と同様に、チームで活動する(協働する)ことを重視しています。そのた



め、卒業研究も個人研究は少なく、ほとんどの学生がグループで研究しています。田中ゼミ3グループと澤崎ゼミ4グループが下記のタイトルで発表しました。



【田中ゼミの発表タイトル】

- ・ミュージック・ケアの魅力
- ・地域活性化のための公的機関Webサイトのリデザインー森田公民館及び福井市ボランティアネットをケーススタディとしてー
- ・殿下地区を活性化させるHAPPYなPR活動

【澤崎ゼミの発表タイトル】

- ・購買・学食の向上のための比較調査研究ーより魅力的な購買を目指すためにー
- ・学内バリアフリー度調査と学内マップの作製ー安心で快適な学生生活を送るためにー
- ・マグマップ販売から考えたマーケティング調査
- ・女子大生向けラインスタンプの作成と販売

田中ゼミ生10名(親族の葬儀のため1名欠席)、澤崎ゼミ生12名、指導教員2名、福井県立大学教員1名、福井工業大学職員1名、仁愛女子短期大学職員1名、その他一般の方6名と、告知が開催間際になったにもかかわらず、多様な所属の方が参加されました。一般の方からは、鋭い質問や適切な提案をいただき、学生は多くのことを学べたようです。

学生の社会的活動報告

仁愛女子短期大学 生活科学学科・幼児教育学科

早稲田大学との学術交流会 in 福井駅前

平成 27 年 8 月 20 日（木）

生活科学学科 生活情報専攻 2 回生 東 真由



8 月 20 日に、早稲田大学大学院地域マネジメントゼミと、仁愛女子短期大学澤崎ゼミで、ガレリア元町の「サンカク」というコワーキングスペースを会場に学術交流会を開催しました。まず、福井駅前の実態を知るべく、全員で歩いて散策しました。駅前には恐竜のモニュメントが設置され、数年後に開通する北陸新幹線関係の工事の真只中でした。散策してわかったことを踏まえて、当日は（1）コワーキングスペースの活用と位置づけ、（2）新幹線開通に向けた駅前空間のありかたとヒント、（3）若者のにぎわいと駅前の関係、の 3 テーマで議論をしました。初対面なのでとても緊張していましたが、早稲田大学大学院の方々がフレンドリーに話してくださって、様々な意見が飛びかい、最終的にはよい議論をすることができたと思います。実はこのコワーキングスペース「サンカク」、正式オープン前ということでエアコンが付いていなくて、大変暑かったです！しかし、汗だくになりながら、環境的にも内容的にも「あつい」議論を交わし、結果的に中身の「熱い」議論へと進んだと思います。他大学との交流は大変貴重な経験となりました。



まちフェスに参加！～マーケティングを学ぶ

平成 27 年 6 月～12 月

生活科学学科 生活情報専攻 2 回生 長谷川 瞳

私たちのゼミ（卒業研究）では、販売を通してマーケティング理論を学ぶことをテーマに選びました。商品は 1 年中使えるという理由からマグカップに決定し、マグカップ販売と共にネパールの復興支援をするために、売り上げをネパールへ寄付することにしました。マグカップには「W/U」というロゴを自分たちでデザインして入れました。これは「With You = あなたといっしょに」という意味があり、一緒にネパール支援をしましょうという思いを込めました。



マグカップの販売のため、福井駅前で開催されていた「まちフェス」へ出店。6～8 月の計 3 回行いました。初めは物珍しさに足を止めてくださる方が多かったのですが、回数を増やすごとに売り上げが落ちていきました。次に、坂井市春江町にあるアルプラザアミのお買い物アイドル、アミ～ガスとのコラボ販売です。好きな子 1 人のサイン付きということもあり、毎回買ってくださる方もいらっしゃいました。結果として、付加価値があると売り上げが伸びることがわかりました。自分たちで企画した商品を販売していくことの難しさと面白さを学べる研究となりました。



ふくい夢アート ハロウィンパレード

平成 27 年 10 月 25 日（日）

生活科学学科 生活環境専攻 2 回生 岩田 菜見

福井でもこんなにハロウィンが楽しめると知ったのは去年、もっとたくさんの人に楽しんでほしいと思ったのが今年です。仁愛女子短期大学に入って私の福井に対する考えは大きく変わりました。ハロウィンはそれを一番思わせてくれた行事です。

毎年テーマに合わせて仮装するのが仁短の特徴です。可愛いからとか好きだからとかではなく



ちゃんとストーリーをつくって中身のある仮装にしています。今年は“なりきりモンスター”ということで、ドラキュラやボリスなどの定番的なものからアイドルやフクロウ、中にはオオカミのかぶり物をイチから作っている学生もいて、とてもユニークなハロウィンでした。街の人から「福井の方ですか？」と聞かれるほどでした。ハロウィンは小さな子供からお年寄りまでたくさんの方を笑顔にすることができるし、たくさんの人と触れ合うこともできる素敵なイベントだと思いました。今年はパレードがありました。楽しい太鼓の音に合わせて、ビックベンチとともに駅前を一周しました。写真を撮る人や建物の中から手を降ってくれる人、その顔は驚いていたり笑っていたりとても表情豊かでした。寒さ的には厳しいところもありましたが、それも忘れるほどでした。

私はもっといろんな人に福井の楽しみ方や良さを知ってもらいたいし、ふくい夢アートも沢山の人の見てもらいたいです。そして、福井駅前がより良いものになってほしいです。そのために学生の力も必要になると思うので後輩に期待をたくします。



50 年後マダムのおしゃれスナップ

平成 27 年 9 月 18 日（土）～27 日（日）

生活科学学科 生活環境専攻 2 回生 野原 夏紀

この企画は、仁愛女子短期大学が開学 50 周年を迎え、これから私たちが歩んでいく 50 年をテーマにしたスナップ写真展です。自分で手作りしたアクセサリや洋服を身につけ、じんたん生とじんたんの卒業生、そして教員の計 19 名を被写体に撮影しました。どのようなマダムになりたいか想像したり、将来なにをしたいかを考えたりして願いを込めた詩も書きました。私は、あえて不機嫌な表情で撮影しました。そのスナップに「笑顔で媚びる女性になりたくない。自分の感情を素直にあらわしたい。どんなときも偽らない強さを持って生きる。」という願いを込めて詩を書きました。また、このスナップ展は西武百貨店で行われていた NY マダムのスナップ展の開催と同じ時期に展示したのですが、NY マダムのスナップは、写真 1 枚 1 枚からそのマダムの個性とファッションへのこだわり、人生の深みそのものがすべて映し出されているように思いました。しかし自分のスナップ写真を見返すと、身につけているものや表情からは、マダムの写真から伝わる強さのようなものが感じられず、まだまだ未熟なのだと実感しました。私は、これから年齢を重ね、いろんなものを吸収していくと思います。50 年後の私は素敵な NY マダムに少しでも近づきたいと思いました。また、このスナップ展を訪れた方々には、



自分の今後を見つめ直したり、ファッションとの関わり方について改めて考え直したりすることができるようになったのではないのでしょうか。

地域の方々とともに考えた 地域コミュニケーション活動

生活科学学科 生活環境専攻 2回生有志



廃校になった坂井市の旧竹田小学校を活用し、宿泊型の体験学習施設「竹田農山村交流センター」の愛称ネーミングと、ロゴマークデザインの依頼があり、生活環境専攻の2回生有志が取り組みました。10月初旬から12月にかけて地元住民の方々と4回にわたってワークショップを開催しながら、互いに持ちよった43案について検討を重ねました。その結果決定した愛称は「ちくちくぼんぼん」。竹田地区の「竹（ちく）」と子どもを意味する「ぼん」を反復させて組み合わせた造語です。フランス語の「bon」には「よい」という意味もあり、活気があふれ、心が躍るような響きが地域の方々にも喜ばれたようです。

またロゴマークは、ひらがなで竹田の「た」をモチーフに家紋のようにシンプルで印象に残るデザインが提案した18案の中から選定されました。決定した案には「+（プラス）」や、「ぼんぼん」を表す二つの丸も構成されています。12月2日の記者発表にも参列し、仁短生として専門性を活かした地域活動を大いにアピールしました。



子育て応援団「すこやかふくい 2015」

平成27年11月28日（土）・29日（日）

幼児教育学科 1回生 八田 唯菜

私は「すこやかふくい 2015」でインフォメーションの活動をさせていただきました。

インフォメーションでの仕事内容は、会場アナウンス、呼びかけ、迷子の呼び出し、車の移動、チラシ配り、来場者のカウントなど様々でした。アナウンスは笑顔で会場にいる全ての人に伝えることが大切で、緊急の時もあり、その場で冷静に対応するのが大変でした。また、アナウンス

以外も、先を見通して自ら動くことが大切であると感じました。

一緒にお仕事をさせていただいたスタッフの皆さんがとても優しく、皆さんのおかげで本当に楽し

くお仕事することができました。また、インフォメーションにいらっしゃるたくさんの方々とコミュニケーションをとれて、本当にボランティアをしてみたいと思いました。

これからもいろんなボランティア活動に積極的に参加していき、人々との繋がりを大切にしていきたいです。



じんあいこどものくに

平成27年10月17日（土）9:30～16:00
会場：仁愛女子短期大学 F号館

幼児教育学科では、毎年の大学祭においてこども向けのアトラクションを集めた「じんあいこどものくに」を開催しています。この企画は、学生が主体となって子ども達が楽しめる遊ぶ場を企画・準備・実践する学びの機会として位置づけられています。ここでは取り組みの内容についてご紹介します。

クラス別開催内容

- 1回生Aクラス「お祭りごっこ」
- 1回生Bクラス「巨大すごろく」
- 1回生Cクラス「アスレチック」
- 2回生Aクラス「劇：おおかみと7ひきのやぎ」
- 2回生Bクラス「バルーンアート」
- 2回生Cクラス「おばけやしき」



1回生Aクラス「お祭りごっこ」



1回生Bクラス「巨大すごろく」



1回生Cクラス「アスレチック」



2回生Aクラス「劇：おおかみと7ひきのやぎ」



2回生Bクラス「バルーンアート」



2回生Cクラス「おばけやしき」

学生の感想

○幼児教育学科 1回生 大橋 楓

私は今年初めて「じんあいこどものくに」を経験しました。私達のクラスは「お祭りごっこ」を企画しました。その中でも私は、お菓子釣りを担当し、クラスみんなで話し合い、協力して準備を進めました。当日は沢山の子ども達の楽しむ姿や、一生懸命活動する姿を見ることができ、大きな達成感を感じることができました。この経験によってクラスの仲が深まり、学校生活がより楽しくなったきっかけになったと思います。

○幼児教育学科 2回生 伊藤優里

アニメキャラクターをおばけ屋敷風にし、懐中電灯を片手におばけを探す子どもたちはイキイキして楽しそうでした。またお絵描きや折り紙などゆっくりできる空間を作りました。そこでは子どもたちとその様子を見守る保護者の姿があり、ほっこりしました。準備している時はこれで良いのかと不安でしたが、喜んでくれたのでとても嬉しかったです。

ボランティア活動報告

仁愛女子短期大学

栄養研究サークル

生活科学学科 食物栄養専攻 2回生

橋本 鮎美

栄養研究サークルでは毎年「もりた夢市」で手作りパウンドケーキを販売してきました。今年は11月1日に森田小学校の体育館で開催されました。毎年メンバーが変わるので、今年はおいしく作れるか不安もありましたが、皆で試作をして先生方の意見をいただいたおかげでなんとか全てのパウンドケーキを作ることが出来ました。

今年はパウンドケーキ（マーブル、ココア、プレーン、サツマイモ、カボチャ）の他にシフォンケーキも焼き、種類を多く作りました。

本番当日は全部売り切れるのか不安でしたが、開始と同時にお客様がたくさん来てくれました。その中には仁短祭で買えなかったから楽しみにして来てくれたお客様や、おいしかったといってまとめ買いしてく



れるお客様がいてあっという間にすべての商品が無くなり、嬉しかったのと同時に売り切れの早さにびっくりしました。売り切れてしまって、足を運んでくださったお客様にお売りできなかったこともあり、来年は今年よりも多く作ってたくさんの方々に喜んでもらえたらと思います。

この活動を通して達成感や充実感を得ることができ、地域の輪の広がりを感ずることができました。売る側も買う側もとても生き生きと楽しそうにされていて、夢市に参加させていただき、私たちもとても楽しく活動させて頂くことができました。森田地区の方々とはとても優しくあたたかく接していただき、輪に入れてくださいました。本当にありがとうございました。

ユネスコサークル

生活科学学科 生活情報専攻 2回生

松川 葵・宮川奈緒美

私たちの主な活動は、本校の学校祭時に行う募金活動を中心としています。学校祭時に活動する理由は、仁愛女子短期大学の教職員から学生、その他の学生で多くの人が集まることから、呼びかけやすいと考え活動しています。

この募金活動に参加して二年目になりますが、去年の反省点である活動時間が短すぎたこと、事前に募金活動をするということを知ってもらえていなかったことを踏まえて取り組みました。模擬店でにぎわう中、大きな声で呼びかけても伝わりにくいこともありましたが、手に持っている募金箱に注目してくれた方はたくさんいました。そしてその際に「募金をお願いします!」と呼びかけ、一人でも多くの人の心に「少しでも募金を試みようかな」という思いが生まれてほしいと取り組みました。自分がエルパなどで歩いているときに見かける、「募金をお願いします」と呼びかけをしている人の大変さは全く気づけなかった去年とは違い、今年はまた一段とみんなが気持ちを切り替えて取り組めたことだと思います。

クラスが一丸となり募金の呼びかけをしたこの二年間は、とても貴重な経験となり、大変さだけではなく、人の温かさにもふれることができた活動となりました。(写真は「ふくいユネスコ総会」で感謝状を戴いた時のものです。)



パソコンボランティアサークル

生活科学学科 生活情報専攻 2回生

友嵩 未菜

仁短パソコンボランティアサークル（以下、パソコンボラ）がスタッフとして協力していた、鯖江市社会福祉協議会（以下、社協）主催の「障がい者のためのPC相談会」は2014年度末で終了しました。しかし、参加する障がい者の方の相談会継続への熱意が強く、パソコンボラが鯖江市福祉ボランティア連絡協議会（以下、ボラ連）に加盟し、2015年度からは同相談会を主催することにしました。ボラ連に加わったことより、毎年10月に社協で開催する「さばえボランティアまつり」への協力を求められ、仁短コーナー（①バルーンアート制作、②ARで動く塗り絵）を企画・運営しました。その他、福井市総合ボランティア開設準備室からの依頼で、福井市ボランティアネットの使いやすさ等に関して、座談会を開催しました。

さばえボランティアまつりではバルーンアートとAR塗り絵を担当しました。以前、福井市のハピリンフェスにおいて、卒業研究の田中ゼミとして同じ内容のボランティアを行いました。ハピリンフェスではちびっ子たちがたくさん遊びに来てくれました。今回のボランティアまつりでは、おじいちゃんおばあちゃんが「私たちでもできる?」と興味を示し、幅広い世代の方たちとふれあうことができました。その中で、耳が聞こえない方（ろう者）の「ハロウィンのかぼちゃを作って欲しい」という手話をボランティアの方が通訳され、試行錯誤しながらなんとか完成させてプレゼントしたところ、とても喜んで大きなジェスチャーで感謝を表現してくれました。言葉がなくてもバルーンアートを通して、心が通じ合えたことがとても嬉しく、今でもその人の笑顔が忘れられないです。その方だけでなく私たちのブースに来てくれた皆さんが笑顔で帰られたように思うので、「ボランティアは大成功!短大生活の素敵な思い出です。

生活科学学科 生活情報専攻 2回生

清水和佳奈

パソコンボラが社協・鳥羽事業所で開催する「障がい者のためのPC相談会」において、私はいつも目が不自由な方と一緒に音声読み上げソフトが入っているPCを利用して、ニュースを読んだり、CDを作成したり、メールを送ったりしました。最初は目が余り見えない方にどのように声掛けすればいいのかが分からず苦戦していましたが、パソコンを教えるだけではなく、色んなお話をしながら距離を縮め、あっという間に3時間経ってしまうまでになりました。教える立場ですが、逆に教えられることばかりで、相談会の間に自分のパソコンに関する知識が増え、人見知りだった私も少しずつ人と話すことが好きになりました。このサークル活動を通して、これからもボランティアなどに積極的に参加し、障がい者の方だけではなく色々な人のサポートができるようになりたいと思いました。これから社会人になってもサークルでの学びを心に留めて頑張りたいと思います。



折り紙サークル

幼児教育学科 2 回生
山本 紗愛

おりがみサークルでは、定期的に福井大学医学部附属病院小児科の入院病棟プレイルームに飾る壁紙作りをしています。また、フェニックスプラザで行われた消費者まつりや公民館などでの折り紙教室も行いました。



消費者まつりでのボランティアでは、クリスマスやお正月が近かったということもあり、クリスマスツリーやこま、ナイロン袋で風を作れるようにするなど、季節を感じることができるようになりました。子どもから大人の方まで楽しんでもらえました。

折り紙を通して、たくさん話をしてくださる方もいて、私たちが教えるだけでなく、子どもや大人の方から「こんなのもあるよ」などと折り方を教えてもらうなど私自身も勉強になることがたくさんありました。折り方を把握しておいても、教えるということは難しいと感じるところもありました。ですが、折り方を把握しておいたということもあり、上手に教えることが出来ました。教える前には、実際に折って折り方を把握しておくという準備も大切であるということを学びました。



これまでたくさんのボランティアをしてきて、折り紙を通してコミュニケーションがとれたり、完成した折り紙を見て、喜んだりしている姿をたくさん見るのができて良かったです。また、折り紙に触れることが少なくなってきた中、多くの人に折り紙に親しんでもらえるような機会が大事であるということを学びました。

ボランティアサークル

幼児教育学科 2 回生
澤 加奈

ボランティアサークルでは、決められた日時に図書館に行き様々な活動をするとともに、県内のイベントや学校行事にも積極的に参加してきました。

図書館での活動としては、子どもを対象として、どの人数でも、どの年齢でも楽しめるような絵本や遊びを提供しています。また、その季節にあった（クリスマスや七夕など）折紙・制作をしたりしています。土日に行っているということもあり、親子で参加される方もたくさんいらっしゃいます。親子のふれあい遊びをすると、皆さん楽しんでくださっているように思います。このボランティア活動を通して、私たちは子どもとの関わりだけでなく、子育て支援についてもたくさん学ぶことができました。

平成27年度 地域活動実践センター活動報告

● 管理栄養士国家試験対策リカレント講座

	開講日	教科 1限18:30~19:30・2限19:40~20:40	講 師 (敬称略)	参加人数
第1回	8月22日(土)	第1回 全国統一模擬試験	牧野みゆき	6
第2回	9月17日(木)	食べ物と健康-1(調理)	谷 洋子	11
第3回	9月24日(木)	食べ物と健康-2(食品)	加藤 隆夫	12
第4回	10月 1日(木)	食べ物と健康-3(食品衛生)	加藤 隆夫	9
第5回	10月14日(水)	基礎栄養学	岩田 章子	10
第6回	10月22日(木)	生化学	谷 政八	11
第7回	10月29日(木)	応用栄養学	牧野みゆき	11
第8回	10月31日(土)	第2回 全国統一模擬試験	牧野みゆき	8
第9回	11月12日(木)	社会・環境と健康-1	出口 洋二	9
第10回	11月19日(木)	社会・環境と健康-2	出口 洋二	9
第11回	11月26日(木)	栄養教育論	牧野みゆき	9
第12回	12月 3日(木)	人体の機能と栄養(解剖生理学)	齋藤 正一	11
第13回	12月 5日(土)	第3回 全国統一模擬試験	牧野みゆき	16
第14回	12月10日(木)	人体の構造と疾患(病理)	齋藤 正一	11
第15回	1月 7日(木)	臨床栄養学(診断)	齋藤 正一	8
第16回	1月14日(木)	公衆栄養学	牧野みゆき	10
第17回	1月21日(木)	給食経営管理論-1	嵐川眞智子	9
第18回	1月28日(木)	給食経営管理論-2	嵐川眞智子	10
第19回	2月27日(土)	第4回 全国統一模擬試験	牧野みゆき	12

● 講師派遣

日 時	講師氏名	テーマ	依頼団体
5月30日	乙部 貴幸	子ども発達の捉え方 ～何が「問題」なのか?～	ふじしま保育園
6月17日	松川 恵子	質の高い保育を目指して	社会福祉法人 町屋福祉会
8月 1日	松川 恵子	幼児期における道徳性や規範意識の芽生えについて	美浜町みずうみ保育園
12月23日	岸松 静代	親と子のデコレーションケーキづくり	仁愛附属幼稚園

地域活動実践センター活動報告

● 学生の社会的活動(ボランティア等)の報告

参加した活動の状況					参加した学生の状況	
活動名	活動日時	活動場所	主催団体	活動の対象	活動サークル・学科の名称	参加人数
あわらスマイルフェスタ	5月16日(土)	あわら市子育て支援センター	あわら市子育て支援センター	幼児・小学生・一般	幼児教育学科・生活情報専攻	4
福井県障がい者スポーツ大会	6月6日(土)	敦賀市総合運動公園	福井県	身体障がい者の方	生活情報専攻	4
丸岡古城マラソン	6月7日(日)	丸岡体育館	丸岡町	一般	生活情報専攻	1
フラワーグリーンフェア2015	6月7日(日)	県総合グリーンセンター	県総合グリーンセンター	一般	食物栄養サークル	7
あわら北潟湖畔花菖蒲まつり	6月13日(土)20日(土)	あわら北潟湖	花菖蒲祭り実行委員会	一般	生活情報専攻	3
木育キャラバン「木のおもちゃ博」	6月20日(土)21日(日)	福井県産業会館	めぐみこども園	子どもとその保護者一般	幼児教育学科	26
村岡地区わくわく合宿通学	6月23日(火)～25日(木)	村岡公民館	村岡公民館	小学生	生活情報専攻	3
あわら温泉カヌーフェスティバル	6月27日(土)	あわら北潟湖	あわら市教育委員会	一般	生活情報専攻	1
すずらん夏祭り	7月11日(土)	すずらん保育園	すずらん保育園	幼児	幼児教育学科	3
もりた夢駅～夏物語～	7月20日(月)	森田駅	森田地区文化委員会	一般	生活環境専攻	28
森田まつり エコキャンドル	7月25日(土)	九頭竜川河川敷	福井北商工会青年部 森田公民館	一般	生活環境専攻	8
殿下自然つるつるいっばい2015	7月、8月	福井市殿下地区	殿下被災者受入委員会	福島県在住の小中学生・未就学児	生活情報専攻	16
上志比児童館夏休み企画	8月	上志比児童館	上志比児童館	小学生	ボランティアサークル	12
サマーチャレンジ	8月6日(木)～9日(日)	芦原青年の家	福井県教育委員会	小・中学生	幼児教育学科	4
妙安寺こども園のお手伝い	8月7日(金)	妙安寺こども園	妙安寺こども園	幼児	食物栄養専攻	1
サマーチャレンジ	8月8日(土)～11日(火)	鯖江青年の家	福井県教育委員会	小・中学生	幼児教育学科	4
カヌーボロジュニア大会	8月21日(金)～23日(日)	北潟湖	日本カヌー連盟	一般	生活情報専攻	3
災害ボランティア	9月16日(水)	茨城県常総市	福井県災害ボランティアセンター	一般	生活環境専攻	1
ふくい夢アート2015	10月4日(日)～25日(日)	福井駅前周辺	福井市 ふくい夢アート実行委員会	一般	生活環境専攻	189
まちフェス	10月4日(日)	福井駅前商店街	まちづくり福井	一般	生活情報専攻	3
ボランティアまつり2015	10月11日(日)	アイアイ鯖江健康福祉センター	鯖江市社会福祉協議会鳥羽事業所	身体障がい者の方とその家族	パソコンボランティアサークル	11
大学祭活動 (募金、書き損じ葉書回収活動)	10月17日(土)	仁愛女子短期大学	仁愛女子短大ユネスコサークル	仁愛女子短大学生・(教)職員・来学者	ユネスコサークル	35
森田地区文化祭	10月18日(日)	森田公民館	森田地区文化委員会 森田公民館	森田地区住民	食物栄養サークル	6
もりた夢市	11月1日(日)	森田小学校	森田地区活性化委員会	森田地区住民	食物栄養サークル	6
すこやかふくい2015	11月28日(土)29日(日)	福井県産業会館	子育て応援団実行委員会	子どもとその保護者・一般	幼児教育学科	64
福井市消費者まつり(折り紙教室)	11月29日(日)	フェニックスプラザ	福井市消費者まつり実行委員会	一般来場者	折り紙研究会	6
子育てで戦隊バレンジャー～おとうさん!もちつきよう!～	12月13日(日)	春江中コミュニティセンター	父親子育て応援団 おっとふあーざー	幼児とその保護者	幼児教育学科	3
はなぞの地域もちつき大会	1月16日(土)	はなぞの保育園	社会福祉法人町屋福祉会	子どもとその保護者・一般	幼児教育学科	4
福井市河合公民館ワドキ教室	2月14日(日)	河合公民館	河合公民館 河合地区子育て支援委員会	河合地区児童	折り紙研究会	5
障がい者のためのパソコン相談会	毎月第三土曜日	鯖江市社会福祉協議会鳥羽事業所	鯖江市社会福祉協議会	身体障がい者の方とその家族	パソコンボランティアサークル	23
仁愛のお姉さんと遊ぼう会	年間(10回)	坂井市立坂井図書館 坂井市立三国図書館	坂井市立坂井図書館 坂井市立三国図書館	幼児～小学生	ボランティアサークル	30
使用済切手・書き損じ葉書回収活動 (学内数カ所にボックス設置)	1年間	仁愛女子短期大学	仁愛女子短大ユネスコサークル	仁愛女子短大学生・(教)職員	ユネスコサークル	4
エコキャップ運動	1年間	仁愛女子短期大学	仁愛女子短期大学学生会	本学学生・教職員	学生会	4
福井大学医学部付属病院小児科入院病棟に掲示する季節の壁面製作	1年間	仁愛女子短期大学	仁愛女子短大折り紙研究会	福井大学付属病院に入院している児童・保護者	折り紙研究会	20
保育ボランティア	1年間	保育園・幼稚園・施設	保育園・幼稚園・施設	幼児	幼児教育学科	142

※当センターでの把握のみ ※人数は延べ人数です。

● 平成27年度 教員免許状更新講習

仁愛女子短期大学が、平成27年度に実施した教員免許状更新講習「教職についての省察並びに子どもの変化、教育政策の動向及び学校の内外における連携協力についての理解に関する事項（必修）」・「教科指導、生徒指導その他教育の充実に関する事項（選択）」の概要は次の通りである。

必須講習	講 習 名	教育の最新事情
	認定番号	平27-35162-00036号
	講 師	松川恵子（本学幼児教育学科教授）・青井夕貴（仁愛大学人間生活学部子ども教育学学科准教授）・乙部貴幸（本学幼児教育学科准教授）・田中洋一（本学生活科学学科教授）・増田翼（本学幼児教育学科講師）・ゲストスピーカー山下清美（仁愛附属幼稚園長）
	講習の目標・ねらい	「教職についての省察」「子どもの変化についての理解」「教育政策の動向についての理解」「学校の内外における連携協力についての理解」の4つの事項について、教員に求められる最新の知識・技能の修得と今日的な教育課題についての理解を深めることを目指す。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日 程	平成27年8月20日（木）・21日（金） 9：00～16：10
	受講者数	195人

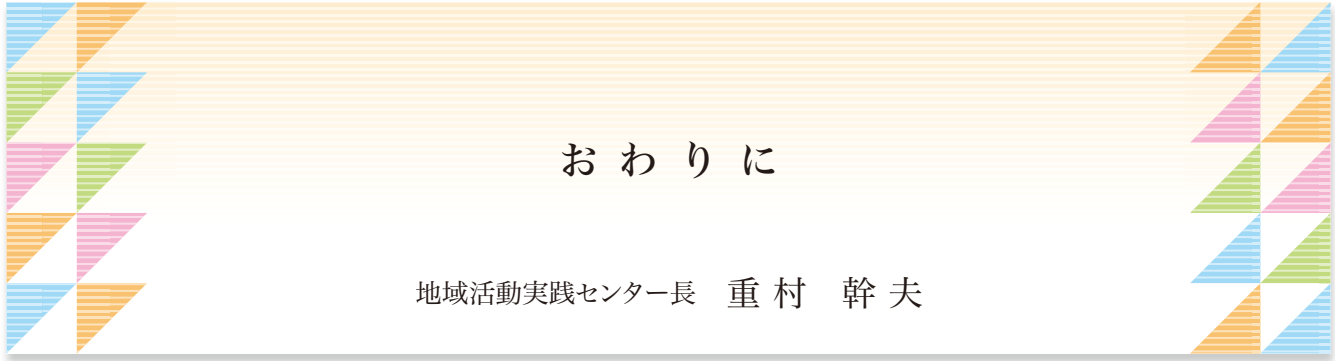
選択講習①	講 習 名	子どもの音楽的感性を育む実践指導
	認定番号	平27-35162-50231号
	講 師	大久保功治（本学幼児教育学科教授）・木下由香（本学幼児教育学科准教授）・河野久寿（本学幼児教育学科准教授）
	講習の目標・ねらい	子どもたちの発達に応じた音楽表現活動の意義を理解し、自然な音楽活動を通して、伸びやかな音楽的感性を育成する実践的な指導について学ぶ。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日 程	平成27年8月5日（水） 9：20～16：40
選択講習②	受講者数	74人

選択講習②	講 習 名	子どもの運動と食育
	認定番号	平27-35162-50232号
	講 師	岩田章子（本学生活科学学科教授）・出村友寛（本学幼児教育学科講師）
	講習の目標・ねらい	子どもの健康を「運動」と「食育」の面から学ぶことを目的とする。「運動」では、子どもの運動遊びと体力の発達について学ぶとともに、自身の体力測定を行い、結果を分析評価する。「食育」では、幼児期の「間食」の大切さを学ぶ。特に「食べたいものの好きなものが増える」子どもを育てるための具体的な食育の方法を学ぶ。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日 程	平成27年8月7日（金） 9：00～16：30
	受講者数	97人

選択講習③	講習名	言葉～保育者と子ども～
	認定番号	平27-35162-50233号
	講師	前田敬子（本学幼児教育学科准教授）・谷出千代子（本学幼児教育学科非常勤講師）
	講習の目標・ねらい	子どもの言葉の発達を再確認した上で、「言葉による表現」について絵本ワークショップを通じて考察する。また、保護者支援を想定し、適切な言葉遣いや敬語に気を付けながら、多様化する現代の保護者への対応を学ぶことによりコミュニケーション能力を高める。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日程	平成27年8月24日（月） 9：00～16：30
	受講者数	127人

選択講習④	講習名	子どもの表現活動と教育指導～造形表現を中心として～
	認定番号	平27-35162-50234号
	講師	重村幹夫（本学幼児教育学科教授）・伊東知之（仁愛大学人間生活学部子ども教育学科教授）
	講習の目標・ねらい	子どもの表現活動について、平面（絵画的）表現と立体（製作的）表現から、その意義や役割を考える。また、子どもの発達過程を踏まえた造形表現に関する知識や技能を実践的に学ぶ。平面造形では幼児の絵画の指導法について学ぶとともに、互いにコミュニケーションをとり、協力してグループ紹介の壁画を作る。立体造形では身近な素材を用いた製作活動を中心にして造形活動の特質を探究する。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日程	平成27年8月25日（火） 9：00～16：10
	受講者数	99人

選択講習⑤	講習名	子どもの遊び～おもちゃと発達～
	認定番号	平27-35162-50235号
	講師	重村幹夫（本学幼児教育学科教授）・乙部貴幸（本学幼児教育学科准教授）・ゲストスピーカー 香月拓（本学幼児教育学科講師）
	講習の目標・ねらい	乳幼児期の発達を理論的・客観的に理解し、それに根ざした遊び・おもちゃを考えることを通じて、受講者における子どもの育ちを援助するための考え方・方法の向上を図ることを目的とする。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日程	平成27年8月30日（日） 9：00～16：20
	受講者数	102人



『SOCIUS』について

本誌「SOCIUS」は禿正宣学長が名づけました。「SOCIUS」とは、ラテン語で「仲間」「友」を意味するそうです。この言葉から「societas」いう「親交、友愛、絆」を意味する言葉ができ、社会を意味する society という英語が生まれたと言われています。また、SOCIUS という言葉は「分かち合っている・結びつけられた」という意味を持つ形容詞でもあります。当センターが地域と短大を結び合わせることによって、新しい仲間が増え、つながり合い、愛や絆が無意識的に感じられるような「社会づくり」を目指したいという願いが込められているということです。

当センターは生活科学学科・幼児教育学科・音楽学科に設置されていたそれぞれの研究センターを平成 18 年 4 月に「地域活動実践センター」に統合して設立されました。「はじめに」でも記しましたが、その目的は、仁愛女子短期大学の建学の精神である「仁愛兼済」を実践するため、本学が保有する知識等の資源を地域社会に提供し、地域社会の発展と文化の向上に資することです。

平成 27 年度は、開学 50 周年を契機として福井市との包括的連携協定が締結され、協定をもとに様々な事業が実施されました。その他の主な活動として、①公開講座・講習会の開催、②地域の教育活動を支援するための教職員派遣、③本学と森田地区まちづくり協議会との連携、④教職員・学生のボランティア活動の支援、⑤ AOSSA の「子育て支援室・相談室」の協力・支援、⑥教員免許状更新講習の開催、⑦機関誌の発行等の事業に取り組みました。

これからさらに本センターが地域に貢献するためには、本学が有している教育資源をどのように活用するかについて、その方策を考えなければならないと思います。そのためにも今後とも、関係者の皆様のご協力とご理解をよろしくお願いいたします。